

時房
時盛(佐介氏)
朝直(大佛氏)

第二十 北條時宗

史眼

一 國難に直面せる時代人

昔齊明天智の朝、百濟救援のため唐との間に戦端を開いたことがあつたけれど、それは遠い昔の語り草として最早や忘れられて居つた。爾來我國は東亞の一隅に外患を絶つて平和を樂しむこと六百年、突如として今一大國難に直面したのであつた。如何に上下をあげての憂慮が大きかつたか、又如何に眞剣にこの外寇に對して國民的團結の強かつたを想像せられるのである。

當時我國の狀態は、源平互に鎬を削つた時代を距ること八十年であつたが、頼朝の遺せる

武家の法度尙ほ突々として嚴存し、武士道の光愈々精氣を放つて居り、且つ北條泰時、時頼の善政によつて國富充實せる最も弾力ある狀態であつた。この時代に外患のあつたことは、誠に國家存立の上から見れば幸福の時であつたと言はなければならぬ。

宜なる哉、將士の意氣に天を衝くの慨がある。元使六回に至るも、國書の無禮を怒つて答書を送らぬ執權時宗の態度、更に文永の役後に來た使をば一を龍の口に、他を博多の濱に其の首を斬つて敢然たる戰意を示して居る。櫓を切つて虜艦に躍入れる河野通有は、文永役にも從軍し、役後三島社に願文を啓して『今後十年の間に賊が來なかつたら、海を越えて進んで賊を撃たん』と、復仇の眦を決してゐる。

幕府は文永の役後建治二年に、外征の計畫を定め、一族北條實政を筑紫探題として出向を命じ、先づ異國征伐の命令を太宰少貳經資に下して、九州の武士の召集に應すべき人員武器馬匹等を調査せしめて居る。その中に、一寡婦が力と頼む子息と聲とを差出して夜を日に繼ぎ馳せ参じさせるといふ、召集請書が今残つてゐる。

勇將の元に弱卒なしと言ふ通り、かよわい女の身でなほこの意氣を示す程、國を擧げて烈

々たる攻撃精神が燃えて居つた。

二 神風なくとも勝てた

神風が吹いた、ゆゑに日本が勝つた、といふやうな風に考へしめたくない。

これについて、時事新報が、昭和六年八月に數回に亘つて、元寇研究の權威者である竹内榮喜少將の意見を連載した。こゝに其の結論だけを掲げる。

「鷹島近海に敵艦覆滅の頃は、元軍として尙戦役の初期に屬し、これから愈々本舞臺に上るところであつた。この時若し大暴風所謂神風がなかりせば、元軍として如何なる地點に上陸を行つたであらうか。思ふに元軍の作戰目標たる大宰府を攻略するため、戦術上鷹島附近に集結せる兵力を、糸島半島西岸の引津船越に移動してから對岸深江附近に上陸するところが最も適當と信ずる。(中略)

然らば若し元軍が颶風に遭はずして最善の方策を取り、深江附近に上陸したとしたらば、如何なる戦況が展開したであらうか。

當時鷹島近海に集結せる元軍の兵力は、長門方面に赴ける兵力を除外しても十萬人以上の

大兵であるから、之を一日中に上陸せしめることは到底出来ない事である。

日露戦役の實驗に徴するに、すべての揚陸材料を完備し、且つ絶対に敵の妨害を受くることなき好條件の場合ですら、一日中に揚陸し得る兵員は僅かに一萬人内外であつたから、途中日本軍の攻撃を豫想し得べき場合に於て、元軍十萬の揚陸には少くとも十日の日子を要するものと胸算せねばならぬ。

之に對し今津、博多、箱崎附近にある日本軍の推定兵力は約五萬人で、六月下旬東路軍が博多灣から撤退した後は、石壘後方近く兵力を纏め、前方を監視しつゝ、情況の變化に應じ得る姿勢にあらねばならぬ。此の際敵軍が唐津灣方面に上陸を企圖するとせば、先づ北方に向つてゐる諸兵を西方に向けるように兵力の配備を建直すことが肝要である。之には太宰府防禦のため、弘安役の五百年以前に構築せられた、太宰大貳吉備眞備献策の怡土城に着眼し、此の城を據點の中心として、今津方面の部隊を使用し、兵力配備の變更を行はねばならぬ。

怡土城は高祖山及其の西麓平地を取入れ、石土混築の壘壁をめぐらした雄大なる永久築城であり、今日尙ほ城壘を存してゐる有様であるから、弘安役當時、假令荒廢してゐたとする

も、必ずや之を使用することが出来たであらう。随つて怡土城の線に配布する新援護隊の占領動作は容易であると言はねばならぬ。この援護下に博多附近にある日本軍の主力を早良川河孟の平地に集結し、元軍の上陸未だ完了せざるに先立ち、攻勢に轉することが必要である。

當時幕府は、中國方面から六萬の軍を増遣中であつて、其の軍隊は早晚筑前の戦地に到着するを豫想し得れども、其の到着を待つて居ては戦機を逸するから、之を待たずして敵を撃つことが、戦術上當然の措置であつて日本軍はなほ敵に勝る兵力を以て、勝を制し得るの公算がある。(中略)

上陸軍の主力たる江南軍は南支那の降参兵であり、歐亞を蹂躪した經驗もなく、殊に士氣の點に於て見るべきものなく殆んど烏合の衆に等しい……しかも我勇士は一國の運命と國民の休戚とを双肩に擔ふて、戦争の意義を十分に理解し、且つ宗教的信念に燃えて神明の加護を確信して居るから、早良川平地の決戦、日本軍に利あること論を俟たない。(以下略)

怡土城は聖武天皇八年、對新羅政策次第に強硬となれる時の築城で、築前糸島郡怡土村高祖山に在つて、糸島平野と博多平野とを瞰制し得る重要な地點。

史料

蒙古といふ國おこる

我國の源平時代、テムジンといふ者、蒙古を統一して其の種族の推戴により成吉思汗の尊號を稱した。皇紀一八六六年(建久元年)に金を侵略して黄河以北を併呑し、其の部將は遠くロシアの南方アゾフ海岸に遠征した。一八八七年(安貞元年—泰時)に病没したが、此の時の版圖は、西は黒海沿岸、東は日本海、南は印度洋に及ぶ實に世界第一の大帝國であつた。

其の後一九一九年(正元二年—時宗)に忽必烈といふ者即位して、我が文永八年に至つて國號を元と稱した。

當時支那本土はこの元の壓迫を受けながら、未だ宋の時代であつた。其後弘安二年に至つて遂に元のために滅された。彼の有名な文天祥の出たのは此の時である。

朝鮮は度々蒙古の侵略を受け、當時國をなしてゐた高麗は、我が建保六年(實朝)に遂に朝貢したがまもなく隸屬の邦となつた。

無禮なる書

高麗王の使節が齎らした元の國書が、九州太宰府に着いたのは、文永五年正月一日であつた。國書の内容を釋すと

一、古より境を接してゐる國は、小國の方から大國に向つて御機嫌伺に来るのが當り前である。

二、我蒙古國は支那の國土を治め善政を布いたので、遠近の諸國皆威光に懐いて、朝鮮は已に朝貢して東藩となつてゐる。

三、日本は昔は支那と往來した國なのに、元の世になつてから一度も使を遣さぬのはどういふ譯か。

四、四海好通するのは天の理だ、兵力を用ふるようになつてから、彼是言つても遅い、如何か、國王よく考へ給へ。

我將士の善戰善防

對島では、守護代宗助國(現宗伯爵家の先代)僅かに八十騎を以て防戰、遂に國難に殉じた。(十月五日)

月五日)

壹岐では、守護代平内左衛門尉景隆百餘騎を以て城に據たか、力盡きて自殺した。(同十四日)九州では、敵艦先づ平戸を襲つた。此所の地頭松浦の一黨よく防いだが、戰死相つぐといふ有様、此時對島壹岐の警報に驚き、九州の將士は皆起つて難に赴いた。すなはち島津經久は箱崎に陣し、少貳入道覺惠、其の子景資は博多を固め、其他大友頼泰、菊池隆泰其子武房、同有隆、肥後の人竹崎季長等の兵、此所彼所の要所々々を守つて戰つた。

「斯様に待ちかけたる所に十月二十日、蒙古、船より下りて馬に乗り旗を擧げて攻めかゝる。……蒙古は太鼓を敲き銅羅を打ちて時をつくる夥しさに、日本の馬共驚き進退ならず、……能き振舞して死する者をば、肝を取りて是を呑む。本より牛馬を美物とする者なれば、射殺されたる馬を食ひ厭き充てり。甲は輕し馬は能く乗る……大將は高き所にあがりて引くべきには逃げ鼓を打ち、懸かる可きには責め鼓を敲くに從ひて振舞ふ。逃ぐる時鐵砲を飛ばして暗くし鳴る音夥し、心を惑ひ肝を潰す。……日本の軍の如く相互に名乗り合ひて、高名不覺は一人づゝの勝負と思ふ所、此の合戰は大勢一度に寄り合ひて、足手の働

く所我もくと取り付き、へし殺し生け取る』……(八幡愚童訓)

我軍はこの戦法を異にし、武器を異にせる敵に對して、殊死して戦つた。今津、百道原、赤坂方面では菊池一族竹崎、松浦黨の激戦あり、ことに百道原の戦はよほどの激戦らしく、我軍の總帥格であつた少貳入道も重創を蒙つたが、敵の副將劉復亭亦入道の子景資の矢先にかかつて重傷を負つた。賊遂に軍を引いて船に還つた。

此の夜風雨烈しく敵艦の破るゝもの多く、賊將金侂が溺死し、賊は遂に退き逃げ去つた。石壘を博多灣の海岸に築く

これは筑前の宗像郡より糟屋、那珂、早良志摩の五郡の沿岸二十五里に亘つて築かれたもので、今糟屋郡の名島から糸島郡の草場邊まで土砂に埋れて残つて居たのを、近頃發掘して、殆んど舊態を復することが出来た。

その構造は土壘の上に石を積重ねたもので、高さ六七尺、厚さ一丈計り、海岸の方は急勾配で攀上ること出来ないやうにし、陸地の方は緩い勾配で石城の上から矢を射落す様に出来てゐる。



敵軍博多に迫る

これより先(五月二十一日)東路軍の賊軍對馬壹岐に來り、

到る所慘虐を敢へてした。壹岐を守る少貳資時(入道覺惠の孫十九歳)龍造寺、松浦、千葉等の兵殊死して戦つたが、賊



軍の火砲の爲めに我軍勝たず、遂に資時は戦死した。

二島を占領せる賊軍は六月五日、筑前の沖にて江南軍と合し、妖雲海を覆ふが如く志賀島に殺到した。爾來十三晝夜、會戦猛烈を極めた。敵の一隊は宗像の海岸にも攻め寄せたが、石壘に妨げられて上陸すること出来なかつた。

草野次郎常長は敵艦を夜襲し其の一艘を焼き敵二十一人を斬つた。

河野通有は其子通忠(十四歳)、伯父通時と二艘の小船で敵艦に近づき、左肩に重傷を負つたが櫓を倒し、釣縄をかけて敵艦に躍入り、賊を斬り賊將の王冠せる者を生捕つて還つた。

●挿 畫

當時の殊勳者竹崎季長の繪卷の一部

季長戦後鎌倉に上り戦況を告げ、還つて土佐派の畫人、長隆長章の二人に畫かせ、自ら説明を加へたるもの、今宮内省の所藏國中敵艦の艦部にありて敵を組伏せたるは季長、軸部にあつて刀を抜けるは大矢野種保の兄弟。

第二十一 後醍醐天皇

史 眼

一 目に見えぬ衰運

北條氏の力も威望も、時宗時代が黄金時代であつた。父祖累世の蓄積せられた勢力—武力、金力—が一時に煥發したのが元寇討滅であつて、それ以後は下り坂となつた。何時の時代も何れの國も大戦の後には、戦捷に酔ふやうな気分になつて、堅實さを失ふ心理になる、時宗以後も矢張りさうだ、それに幕府に眞に偉大なる人物が拂底した。執權でも内管領でも大磐石のやうな底力がなくなつて、加ふるに儉約が行はれなくなつた。奢侈は武力を鈍らせ金力を衰えしめる。

北條初代頃の家屋は板葺か茅葺で、衣服なども質素な水干であり、飲食の如きも、足利義氏が執權時頼を自宅に招いた時、脱斗飽に蝦蟇餅ですました程儉素であつたのが、時宗以後

には、執権家の屋根が檜皮葺になつたやうであるから諸事華美に赴いたことであらう。それには將軍家を京都より迎へるやうになつて、京都との往復が頻繁になつたことにも原因する。時宗の歿後五十年で鎌倉幕府が倒れたが、高時の豪奢は史料の犬合せなどでも推察される。

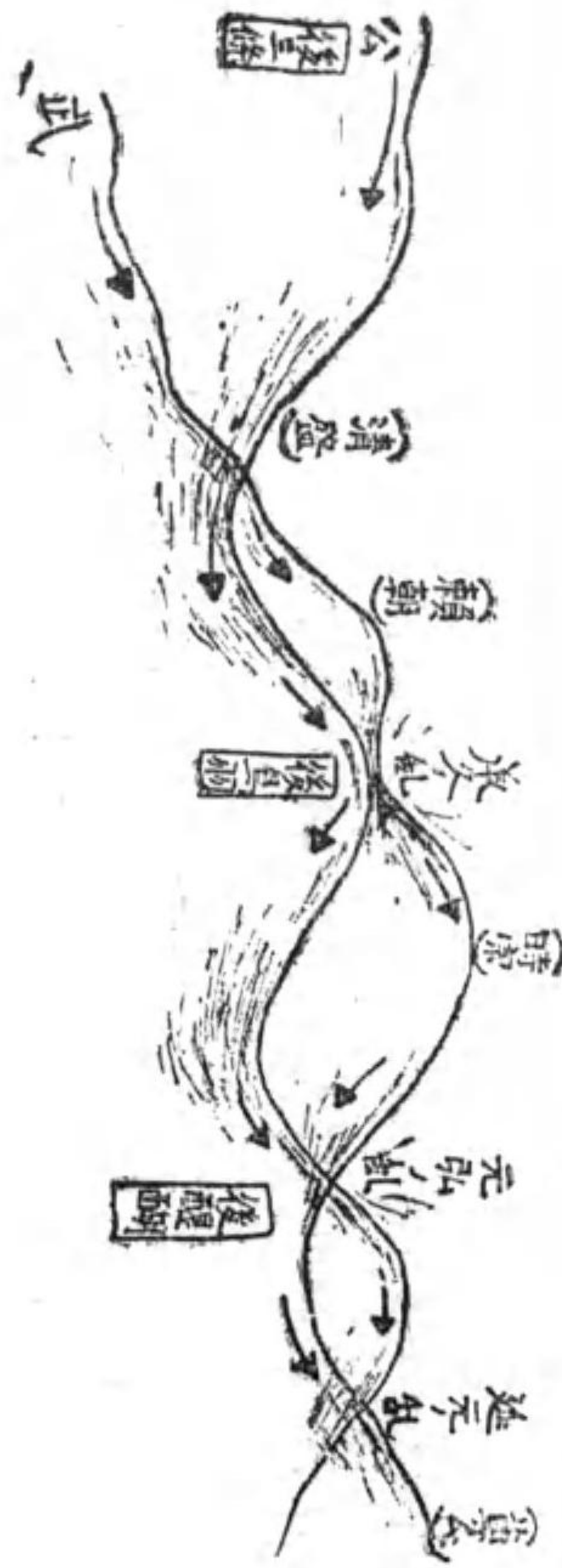
二 公武勢力の消長

後三條天皇の政權を朝廷に回復せんとし給ふ御意志は、幾多の變遷と消長とを経て、遂に建武の公家一統の御政治に至つた。

源平の武家も其の初は藤原氏の爪牙に甘んじたが、いつしか藤原氏の政權掌握の甘粹に野望を懷き、平氏先づ政權を藤氏の手より奪ひ、源氏又之について鎌倉に幕府を開いて北條氏に至つた。此間に公家の政權回收運動と幾度から衝突を重ねたが、この公武二つの流れは、時に盛衰の勢はあれど、建武中興の以後に至つてもなほ依然として波を起して明治の直前まで續いてゐる。

三 正成と義貞

●「正成一人生きてありと聞召さば御運遂に開かるべしと思召したまへ」



この笠置所在所に於ける正成の奏言の如何に自信を以て忠誠を表はした金鐵の言であらう、大楠公の面目この一語に躍如たるものである。

赤坂、千早の城に雲霞の如き大軍を引受けて、少しもひるまず奇計百出寄手の軍をなやましたことは、國語讀本にも出てる。

正成が笠置に奉伺したのは無論始めての参内であつたが、其以前に勤王の志を抱いてあつたであらう。といふのは日野中納言俊基が病と稱して紀伊遊行の間に此の方面の豪族と氣脈を通じてあつたことから考へられる。

正成といふ人は軍略に長じた勇武の人であつたと共に、宗教的信仰の非常に篤い人であつた。赤坂城を焼いて退散する時、鎧を脱ぎすて、敵前を通つた時、守兵怪んで放つた矢が體に當つて跳返つた、よくく見れば、觀音の守袋に當つてゐたといふやうな事が、太平記に見える。

「正成一人生きてある間」はといふ信念は、ただの勇氣や智謀からは出て來ない。其の奥底の清らかな信仰の泉から流れ出て來るものであらう。

●義貞が海神に祈つて干瀉を進んで鎌倉に攻め入つたといふ逸話を、荒唐無稽なりとし太平記の作者の戲筆だなどといふ學者もあるが、現在と六百年昔と同一の土地の状態でもなかつたらうし、二十餘町一時に干上るといふ「二十餘町」に深く拘る必要もなからう。鬼に角月の入る頃には潮が干くのは當然の事であるから、どの位退いたかは深く太平記を責めなくてもよからうと思ふ。

三軍の總大將である義貞程の人が、潮の干満について知らぬ事もあるまじく、且つは此の手の合戦に部將大館宗氏が戦死して一軍の軍紀がともすれば、不振に陥らんとするを引立て

なくてはならない。すなはち海神に祈つて黄金造りの太刀を海に投じ、干潮を待つた。義貞の心持が分るではないか。果して月の入るころ海水遠く引いて神助現はれたと見た一軍の士氣はどうであつたか。

眞劍になればなる程、自己の力の小なるを感ずるのは人情である。此の時に神助があつたとか、戦勝の前兆があつたとかいふことが如何に全軍の士氣を振立たしめるに効があるか知れない。巧みに之を用ふるのが名將の機智で、其例はいくらもある。しかしこれを以て義貞といふ大將に神佛信仰の心が無い。と言ふにも當るまい事實分倍河原の會戦では相模衆の力を得て僅に勝を制して居るし、今大鎌倉攻撃に當つても、北條方如何に衰へたりと雖もまた其の勢攻撃軍に伯仲してゐる。義貞に取つてはこれを畢生の大戦である。誠を披き己を空くして神前に祈を捧ぐる心持はきつと有つたに違ない。

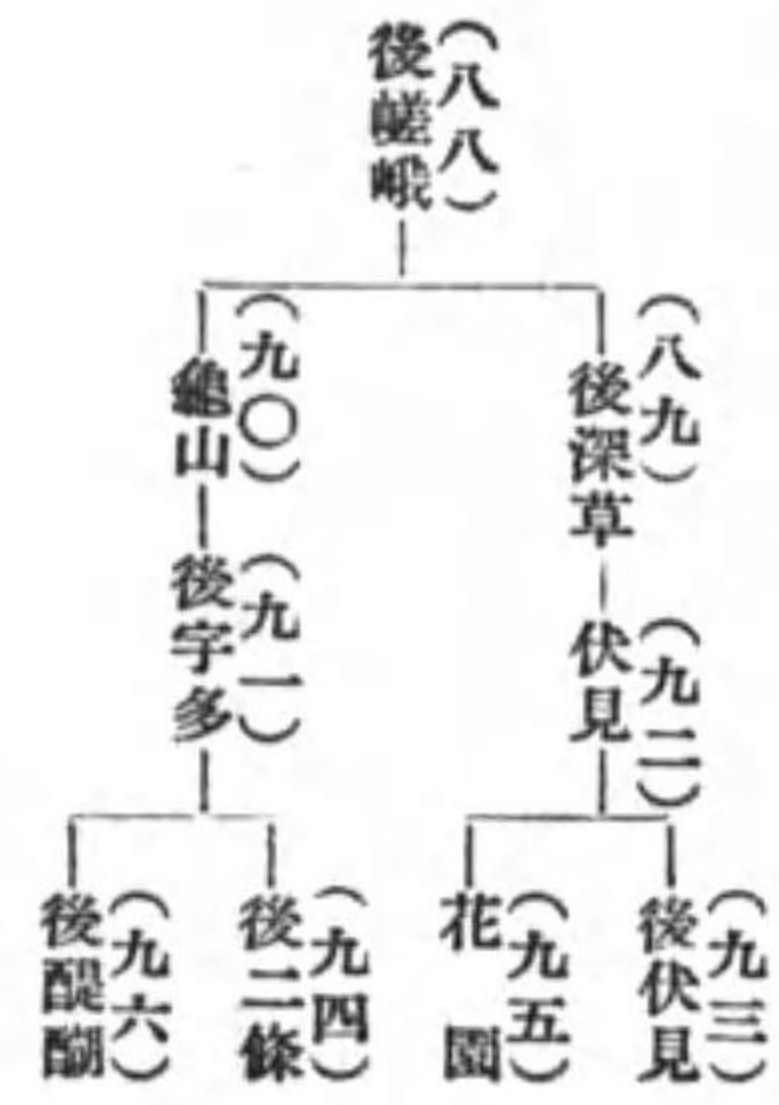
話がずつと新らしくなるが、日露戦争の末期、即ち奉天會戦の戦機まさに熟しつゝあつた時、滿洲軍の參謀長兒玉大將が、毎朝人なき所に立つて旭日を拜したといふ有名な話がある。兒玉大將と言へば當時今孔明の稱ある智謀百出の將軍であつた。其大將が沈思瞑目靜かに日

輪を拜した其の心持を考へなくてはならない。

史料

幕府の専横

昔天皇の皇位御繼承は一に父帝の御心に定つてゐた。それで皇位は必ずしも皇長子に限らせられなかつた。然るに北條氏は長多くもこの皇位御繼承に干渉申上げて、或は天皇の思召にそむき、或は御在位年數を御制限申上げたり、甚だ専横の振舞が多かつた。其の間の消息は次の御系圖を見てもうなづかれる。



數千匹の犬を集む

「諸國へ相觸れて或は正税官物に募りて犬尋ね、或は權門高家に仰ぎて之を集めける間、國々の守護所々の一族大名、十匹二十匹飼ひて鎌倉へ引き進らす。是を飼ふに魚鳥を以てし是を維くに金銀を鏤む。其費甚多し。輿に乗せて路次を過ぐるには道を行く人も馬より下りて是に跪きて、農を勤むる里人も夫に執られて、是を昇ぎ、斯くの如き賞翫輕からざりければ、肉に飽き錦を着たる奇犬、鎌倉中に充滿して四五千に及べり。月に十二度犬合せの日とて定められしかば、大名一族御内、外樓の人々或は堂上に座をつらね、或は庭内に膝を屈して見物す、時に兩陣の犬共一二百匹づつ放し合せたりければ、入り違ひ追ひ合せて、上になり下になり噉み合ふ聲天を響し地を動かす」(太平記)

笠置の行在所

元弘元年八月二十四日の夜、天皇は大塔宮と共に内裏を出て給ひ、奈良を経て笠置山鹿鷲寺に行幸になつた。御供の公卿には按察大納言公敏、萬里小路大納言宣房、同中納言藤房弟宰相季房などで、侍分には近藤左衛門完光を初めとし武士五百騎ばかり、本堂を皇居として

假の行宮に暫らくおはしますことになつた。そこで近國の名ある武士をおよびになつたが、眞先に馳せ参じたのが楠正成であつた。

大塔宮はなほも兵をお集めになさらうと、笠置を出でて一時楠の赤坂の城にも御滞留になつたが、大和紀伊の兵をしきりにお召しになつた。

やがて北條の大軍ひしひしと笠置を圍み、其勢凡そ二十萬騎と言はれ、笠置の四方二三里の間に賊の軍勢が集つたが、要害堅固で北西南の三面には木津川、柳生川の大河流れ、後は山又山で河に臨む所は斷岸絶壁をなし、容易に陥れる事が出来なかつた。

ところが九月一日の夜、案内を知つた賊兵五十人許り城の裏手より木津川の絶壁を攀ち上り、さすがの難所を通過して行宮に火を放つたので、不意を打たれて城遂に陥つた。

護良親王

大塔宮護良親王は、笠置の安否を氣遣はれ暫く奈良の般若寺に忍んで居られたが、笠置落城と共に賊軍五百騎ばかり、宮がこゝにお出でになることを知つて押し寄せて來た。

『あらばよし自害せんと』と思召して、既に推膚脱がせ給ひけるが、『事叶はざらん期に臨み

て、腹を切らんこといと安かるべし。若しやと隠れて見ばや』と思召し返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三あり。二の櫃は未だ蓋を開けず、一の櫃は御經を半取り出して蓋をもせざりき。此の蓋を開けたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、其上にお經を引き被ぎて、『隱形の呪』を御心の中た唱へてぞ座しける。『若し搜出でらるれば、頓て突立てん』と思召して、氷の如くなる刀を抜きて、御腹に指し當て、兵ここにこそと言はんする一言を、待たせ給ひける御心の中、推し量るも尙淺かるべし』云々。かうして賊の手より逃れ給ひ、大和紀伊の兵を集めて吉野山に籠らせられ、千早の楠正成と相呼應して義軍を起された。

やがて賊將二階貞藤數萬騎を率ゐて攻めかゝり、城遂に支へかねて村上義光宮の御身代りに戦死し、其の子義隆又宮を護つて落ち行く途上に難に殉じた。

『宮は藏王堂の大庭に并み居させ給ひて、大幕打ち揚げて最後の御酒宴あり、宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬さき、二の御腕二個所突かれさせ給ひて、血の流ること瀧の如し、……村上彦四郎義光鎧に立つ所の矢十六筋、枯野に残る冬草の風に伏したる如くに折りか

けて、宮の御前に申しけるは……恐れあることにて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具とを下し賜はりて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はん〔太平記〕

諸國勤王の軍

正成が一族を率ゐて勤王の軍を起してより、護良親王の令旨諸國に下るに及んで、勤王を志す者隨所に起つた。

赤松則村は親王の令旨を受けて、元弘三年正月義兵を播磨に起して白旗城に據り、山陰山陽の幕府の命に應じて東上するものをこゝで扼止した。

兒島高則は備前の人で、天皇笠置に御座あつた頃に義軍を起し、又隠岐へ遷され給ふと聞いて、ひそかに天皇を奪ひ奉らうとして果さず、庭前の木を削つて志を聞え上げた。

名和長年は伯耆の人、天皇隠岐より還幸し給ふや一族を率ゐて天皇を護り、賊將佐々木清高の兵を取り、京都に供奉した。

足利尊氏

源義家の第二子、義國に二人の子があつて、兄を義重といつて新田の庄に居り弟義康は足

利の庄に居り、これが新田、足利の先祖となつた。高氏は正に七世の孫に當つてゐるが、代々北條氏と親しかつた。

高氏は官軍京都を襲ふの報を得た時、選ばれて名越高家と共に京都守備、宮家討手の大将として差向けられたのであつた。しかし高氏の明敏は、もう時代が北條幕府の永續を許さぬを見、始めから京都への出發を深く考へた。彼は鎌倉出發に臨み其の妻子（高氏の妻は北條の一族赤橋氏の出）を伴はんとしたが、長崎圓喜に猜されて遂に思ひ止まつた位、高氏の西上は幕府に取つて危険なものであつた。

果して彼はひそかに近臣に命じて、急ぎ船上山に到らしめて歸順を申奉らせ、近江に至つて綸旨を拜したが、深く之を秘し、名越高家が赤松則村の兵と山崎で戦つた時も、殆んど傍觀に等しい態度を取り、高家討死するや丹波に入つて始めて部下に綸旨を示して六波羅を攻めた。

新田義貞

義貞もまた高時の命令で一度は出征して、千早城の攻撃軍中にあつたが、護良親王の令旨

を拜し、病と稱して新田の庄に歸つた。たまく、幕府は京都守備の大軍を發せしめんとして軍用金の調達に狂奔し、義貞の所領に對しては六萬貫の指定納入を命じた。この過大な誅求を機として遂に義貞は幕府討滅と決斷し、竊かに越後信濃の一族を集め、京師守備軍の出發を窺ひ義軍を起して、一路鎌倉を指して進軍した。

鎌倉陥り北條氏亡ぶ

元弘三年五月八日、義貞は一族郎黨を生品明神いぐしなの社前に集め、令旨を奉讀して義軍を起した。

先づ守護職長崎孫四郎を斬つて出陣の血祭とし、武藏の國府(今の府中町)を目標として當時の鎌倉街道を南進した。翌九日の夕入間川に達した頃には、常總の兵來り會する者多く軍容頓に振つた。警報鎌倉に達するや、幕府は櫻田貞國、長崎高重に兵六萬を附して之を拒がせた、又別に金澤貞將に兵五萬を授けて千葉を経て、新田軍の左側を攻撃せしめ、兩軍大に武藏國小手差原や分陪河原に戦つた。兩軍一勝一敗したが、最後に相模國三浦義勝の率ゆる六千の新銳來り投ずるに及んで、新田勢大に活氣づき、翌十六日の拂曉遂に敵の本營を突い

て勝を得、長驅直ちに鎌倉に迫つた。いよく戦は檜舞臺になつた。目ざす大鎌倉は指呼の間にある。十七日義貞は兵を三分して鎌倉を圍んだ。

● 極樂寺切通 大館宗氏兵十萬

● 巨福呂坂 堀口貞滿十萬

● 假粧坂 義貞自ら之を率ひ、總豫備隊とす

十八日兩軍激戦あり、巨福呂坂の守將赤橋守時戦死して、堀口の兵進んで山内に入った。十九日極樂寺方面の攻撃軍大に振ひ、防禦を破つて鎌倉に一步踏入つたが、大將大館宗氏戦死して後退し、攻守其勢を顛倒して腰越まで追つめられた。義貞急を聞いて自ら之に當り、二十一日一支隊を田鍋谷より迂回せしめ、更に一支隊を稻村崎に派し海岸を徒渉して由比濱に出で火を民家に放つた。

かくして二十二日、さしもの豪華を極めた北條氏は遂に全滅してしまつた。

「さる程に餘煙四方に吹きかけて、相模入道の御屋形近く火かかりければ、入道殿千餘騎にて葛西谷に引籠り給ひければ、諸大將の兵どもは、東勝寺に充ち滿ちたり。是は父祖代々墳

墓の地なれば、爰にて兵どもに防矢射させて、心閑かに自害せん爲めなり。(中略)

高重(長崎圓喜の嫡孫)が鎧に立つ所の矢二十三筋、蓑毛の如く折りかけて葛西谷へ参りければ、祖父入道(圓喜)待ちうけて、「何とて今まで遅かりつるぞ、今は是までか」と問はれければ、高重畏り「若し大將義貞に寄せ合はせば、組みて勝負せばやと存じ候ひて、二十餘度までもかけ入り候へども遂に近き得ず、……あはれ罪のことだに思ひ候はずば、猶奴原を濱面へ追ひ出して弓手右手に相付け、車切胴切立割に仕り、棄てたく存じ候ひつれども、上の御事如何かと御心許なくて歸り参りて候ふ」と聞くと涼しく語るにぞ、最後に近き人々も少し心を慰めける。(中略)

長崎入道圓喜は是迄猶ほ相模入道の御事を奈何と思ひたる氣色にて、腹をも未だ切らざりけるが、長崎新右衛門今年十五になりけるが、祖父の前に畏りて「父祖の名を顯はすを以て、子孫の孝行とすることに候ふなれば、佛神三寶も定めて御免こそ候はんすらん」とて、年老いたる祖父の圓喜が、眩のかかりに二刀差して、其刀にて己が腹を切りて、祖父を取つて引き伏せ其上に重なりてぞ臥したりける。此の小冠者に義を進められて、相模入道も腹切り給

へば……其の門葉二百八十三人我れ先きにと腹切りて、屋形に火をかけたれば猛炎昌んに燃上り黒煙天を掠めたり。(太平記)

天皇御みづから政を行ひ給ふ

建武元年正月、恒良親王を立て、皇太子となし玉ひ、護良親王を征夷大將軍に、成良親王を關東管領に、義良親王を陸奥鎮守府將軍にそれく御任命になつた。この年十月新に雑訴決斷所を設けられて、各人の領地の訟を所斷せられ、十一月窪所、武者所を置かれて武士を統轄せしめられたり、非常な御多忙にかかはらず、天皇は銳意北條氏の弊政刷新に御勵精遊ばされた。

又正成以下に論功行賞が行はれた。すなはち正成には攝津河内和泉の守護を、高氏には武藏相模常陸の三國を下され長くも御名尊治の一字を賜つた。義貞には上野播磨などそれく御恩賞があつた。

第二十二 楠木正成

史眼

一 行つまれる時代

建武中興の御事業が成功した。それは第一に後醍醐天皇の御英明なる天資の致す所であつた。次に日野俊基や藤原藤房の公卿、楠正成北畠親房などの武人の翼賛に待つ所も多かつたに違ひなかつた。もう一つ見のがせないのはやはり時代の趨勢である。なほ言を換へば、當時の土地経済政策の行きつまりである。土地に窮せる武家それは上も下も、自分の子孫にも郎黨にも分ち與ふべき立錐の地もなき窮地に置かれた彼等は局面の打開即ち戦争を望んでやまなかつた。

いよ／＼其の重苦しい局面の打開が始まつた時に、彼等は何れも小躍して各信する所に馳せ参じた。彼等は此の戦争によつて時勢は轉換し、もつと住みよい世界が来るものと思つた

からであつた。

北條の末期頃、如何に土地が不足してあつたか、如何にして限りある土地を以て多數の満足を買はうとしたか、其の苦しい政策の一端をのぞいて見る即ち



(辨濟使)とか(名主職)とかは昔は無かつた。かういふ新役人が割り込んで來たので、舊役人が其のために苦しい思をしなければならないことになつた。

それ許りでなく、地頭職が半分になつたり三分の一になつたりして、二分地頭とか三分地頭とかゞ出來、従つて夫れ以下の役人の所得が半分になり三分の一に減じて行く、それでも其の猫の額程の土地を、(名主職半分は一町二段位の土地)堂々たる武士が一生懸命に努力して、やつと獲て得るといふ情勢であつた。

だから中興の御事業に御味方申した武士は多く所領に目が眩んだ我利々々の徒が多かつた

のである。

二 尊氏の成功せる原因

ところが中興の業成つて、待つて居つた恩賞が所期に違つた。朝廷又記録所や雑訴決斷所をして大に時局を救済なされやうとしたが、限りある土地を以て之等非望の武士に満足と與へる譯に行かぬ事は、北畠親房が已に喝破した通りである。

幻滅の悲哀とでも言はうか、是等の武士達は、あはれ何かの不思議が來つて再び武家が天下を取りたらばの聲を發するやうになつた。此の人心の動搖を見、且つは平氏たる北條氏が倒れて源氏之に代るといふ、其頃の輿論に乗つて出たのが、源氏の後裔である尊氏であつた。

三 行政官としての正成

是等の野望滿々たる武士の中に、眞に誠心を傾けて忠節を全くせる楠公及其の一族の正義は、一段の光輝を發して見えるのである。

公は智勇に秀で、あつたと共に、仁徳高き君子であつた。

『河内の國のある里に一人の貧しき農夫あり、天性至孝にして老いたる母を養ひけるが、母病に冒され

て次第に惱み行くを、何とかして治癒せんと針灸藥餌に心を竭せど、其甲斐なく、今は其命も且夕に迫りけり、然るに其頃他郷より來りし名醫ありて、其容體を見て、如何にも難治の病なれども、我藥を施さば八九は治るべし。されども其藥は舶來にて貧家の汝の及ぶ所にあらずと、袖を拂つて去らんとするを、如何にも貧しき者なれども、母の死するを座して看てあるべきか、其藥の價は如何程かと問ふに、黄金十枚と答ふ。

農夫は母の命には換へ難ければ、父祖より傳はりし田地を沽りて整ふべければ、今宵より藥を與へられよと請ふにより、彼醫師一二點を配藥して與へたり、農夫之れを母にすすむるに、苦惱頓に弛みけり。農夫は大に喜びて近隣を馳けて田地を沽らんとすれど頓にも沽れず、漸に質に入れて黄金五枚を整へ醫師に渡し、残五枚は不日才覺して進ずべしと、日毎に彼の醫師の療治を受けしに、病勢半ば減じたり。農夫は喜び如何にもして残りの五枚を整へんと、心を碎きしが如何になしかん。翌日黄金を約の如くに與へけり、其後いくばくもなく母の病平癒せり農夫は歡喜雀躍して手の舞足の踏む所を知らず。然るに一日當所の庄屋先立ち、知縣の官吏矢庭に來つて農夫を擲め、有無をいはず引立ゆきぬ。老母は夢の心地して後に着いて往て聞くに、この農夫近隣の馬を盗みて沽れること露はれたるなりけり。斯て農夫官吏に向ひ、いかにも下僕盜人たり。其故はただ五枚の黄金により母の命絶んとす。因つて不長のことゝは知れど、黄金整ふ術なければ、盗みて他に沽たるなり。今は老母も病癒て人並になりぬれば、下僕刑に行はるとも、絶て憾あることなしと申しければ、官吏は之を聞き農夫の至孝の心を憐みて其罪を弛べんとすれど、それにては國家の刑法立がたし、奈何にせんと正成に訴へけり。正成聞いて歎息し、かかる孝子は世に稀なり、さるを不幸にして其家貧しく老母が重き病に當つて他の

馬を盗むに至る。嗚呼之れ誰の罪ぞや、豫て一郡一郷を指圖せしむるは、夫等の事を救ふにあり。夫だに知らぬは職に怠り其任に堪えざるを、吾又それを知らずして其一郡を委ねしは、其越度我にありと深く其身を憤みて馬主に馬を返さし、求めたるものには金を與へ、さて彼孝子が質入れたる田地を償ひて彼に與へ、其他にも物を與へて其の至孝を稱せらる。……母子は元より見聞きたる人毎に、あはれ尊き國主やと貴み徳を慕ひ、尙事あらば俱に死なんと、心の裡に誓ひけり。(日本武將傳一夕話)

史料

武家の政治を喜ぶ者少からず

武士の不平の聲はまづ恩賞の不公平を叫ぶ聲から出た。

赤松則村はもと播磨の守護であつたが、建武の恩賞には佐用莊一個所を安堵されたのみで、同國は新田義貞に下されたので、則村は不平に堪えず忠勤を勵んだ結果が降參不義の徒より下れるを怒り、後足利尊氏に従つて叛いた。

すなはち王事に勤めた者の心に、眞に勤王の大義を辨へたるは稀で、建武の新政によつて恩賞をあてこんだ我利の亡者が大部分であつた事が知れる。

でこれ等の徒輩が、むしろ武家政治の昔を却つて好ましきものに思つた。

この事について神皇正統記は嚴然として、これ等の非望を糾斷してゐる。

「君は萬姓の主なれば、有限の地を以て無限の人口に分ち與ふること、推して難かり奉るべし。若し一國づゝを望めば六十六人にて塞りなん。一郡づゝと言ふも日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも千萬人の人は喜ばじ、況んや日本の半を志し皆から望まば帝王は何處を知らせ給ふべき」(神皇正統記)

護良親王諱にあはせらる

尊氏の野心を觀破し玉へる親王は、楠、新田、名和等と密議し、尊氏を誅せんとしたまへるに、たましく哀都に流言あつて、「親王、尊氏を圖り給ふ」と尊氏は早速天皇に訴へ奉つた。天皇色々に尊氏を諭し給つて一時納つたが、間もなく尊氏は親王の募兵の書を手に入れた。之を以て再び天皇に強訴し、遂に親王を鎌倉に幽し奉つた。これが建武元年十一月の事である。

高時の子時行

鎌倉陥るの日高時の弟季時、其家臣諏訪盛高に高時の子龜壽を連れて逃げんことを命じた。盛時すなはち信濃に遁れ、舊領諏訪に據り、この地の豪族と力を協せて兵を募り、建武二年七月兵五萬を以て時行を奉じて鎌倉を攻めた。

官軍竹の下箱根に戦敗る

賊將直義箱根の儉を守り、尊氏は足柄より官軍の脊後を衝かんと欲し、竹ノ下(足柄村大、字竹下)に進出して尊良親王の軍を襲つた。然るに大友父子、鹽谷高貞等賊に内應したので親王の軍不利に陥つた。義貞は直義の軍を箱根に破つたけれど、竹ノ下の敗報が聞えて部下の將士又離反するもの多く、遂に義貞は軍をまとめて箱根を後退するの已むないことになつた。

淺川の戦

雲霞の如き賊軍海陸を蔽ふて東上するの警報は頻々として京都に達して、上下震駭して色を失つた。

これより先義貞は兵六萬を以て播磨の白旗城(赤松則村)を攻めて居たが、五十日に及ぶも城が陥らずに居る。

廟議は正成に對し急ぎ攝播の地に赴き、義貞に協力して賊軍壊滅を命ぜられやうとし、正成を召された。正成は「今賊軍は西國の新鋭を得て其の勢破竹の如くなれば、遂に之を防止することは至難である。申すも畏き事乍ら、陛下には今一度叡山に行幸を仰ぎ、賊の大軍を京都に入れ臣は河内に下つて賊の糧道を絶たば、賊をして潰滅せしむることを得ませう」と奏上したが、坊門清忠年内二度の山門行幸は恐多い極みであると遂に之を斥け、廟議は初めの如く正成赴援に決した。

正成心に決する所あり、嫡子正行を途上櫻井驛に召寄せ、史上有名の大遺訓をのこして兵庫表に進發した。

兩軍の作戦計畫

一 官軍

楠木軍は會下山一帯の高地に陣を張り、軍を三分し右翼隊は正季を將とし、左翼隊は一族志貴頼之之を率ひ、中央の本隊は正成自ら之を督した。

新田軍は和田山一帯の海岸に配列し、同じく軍を三分し大館氏明三千餘騎を率ゐて和田岬

に脇屋義助は五千餘騎を従へて經島キヤウジマ附近に位置せしめ、敵の和田岬を迂回し來るものに備へ、義貞は和田山後方にあつて濱街道の敵に備ふると共に、楠木軍との連絡に當つた。

2 賊軍

尊氏の水軍は、細川定禪を先鋒とし、和田岬以東に上陸せしめ、本隊は尊氏之を率ゐて、機を見て駒ヶ林附近に上陸せんとした。

直義は芦屋附近に於て隊を三分し、少貳頼尙をして濱街道より、斯波高經をして山の手より、中央の本隊は自ら之を率ゐて西國街道を東上せんとした。

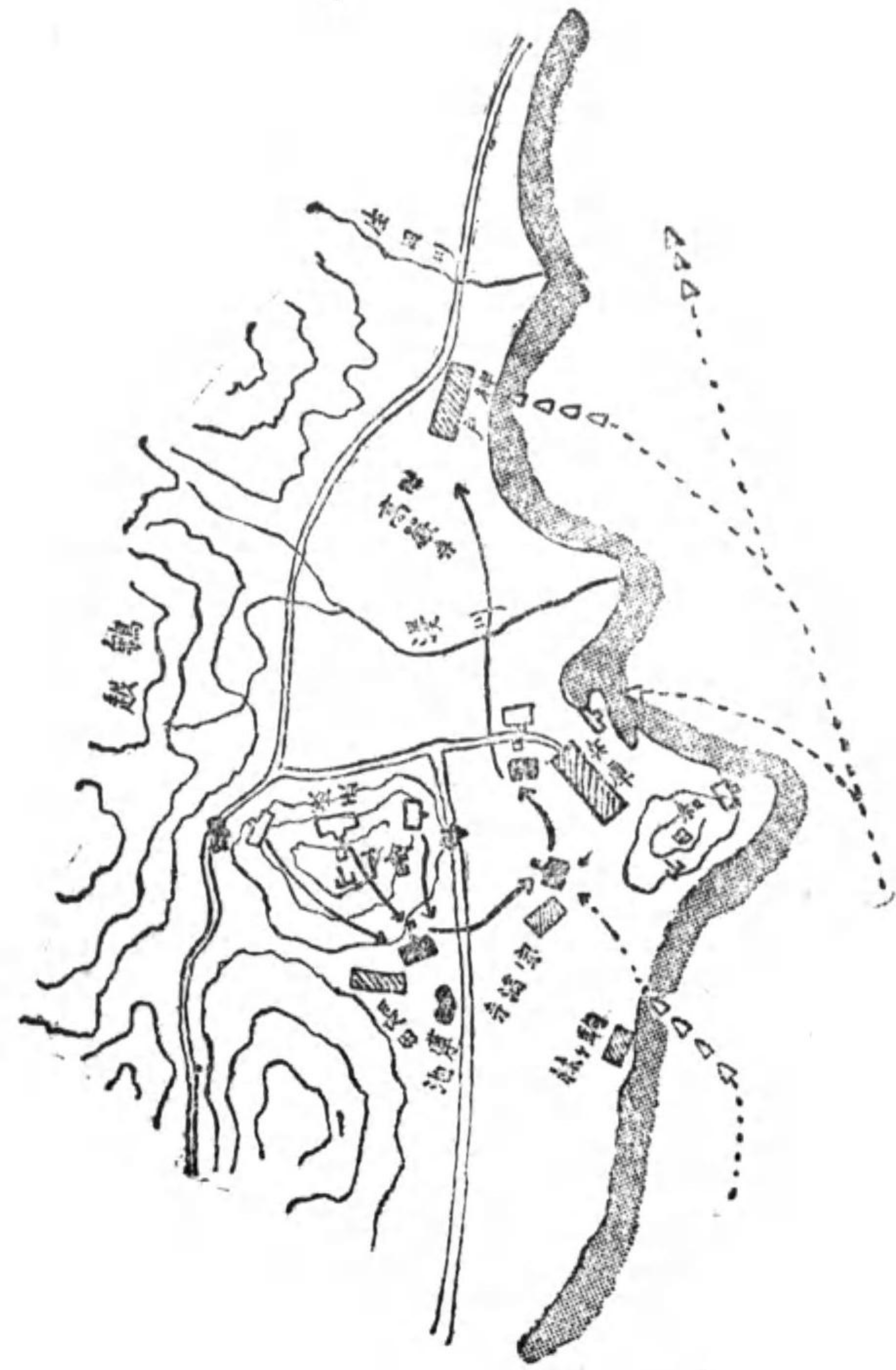
會戰

明くれば延元元年五月二十五日、兩軍は各其部署に依つて戦闘に入つた。午前八時頃賊水軍の先鋒は和田岬を東に迂回して、一部は經島に上陸し、脇屋隊と戦闘を開いたが義助掩撃して之を全滅せしめた。是に於て細川定禪は船隊をなほ東に導き、神戸の濱に上陸を開始し、更に一部を東に進ましめた。是に於て新田軍は脊面の脅威を感じ、漸次東方に移動して和田山の配備著しく弱くなつた。この機を見て尊氏は其の本隊を駒ヶ林東に上陸せしむることが

出來た。

楠木隊方面に於ては、左翼の志貴隊敵の中央軍の先鋒赤松隊と戦を交へ、右翼の正季隊亦賊の山の手の斯波高經を狭路に扼して猛撃を加へつゝあつた。正成は一意直義を得んとし戦闘の進展を待つて居たが、賊の本營が長田に來れるを見、好機到れりと急に命令を下して山を下り直義の陣に殺到して縦横に奮撃した。左翼の志貴隊亦山を下つて之に加はり、直義の陣潰亂し蓮池の附近に敗退の頃には追撃益々急に、將に直義を獲んとしたが、賊騎藥師寺某己の馬を以て直義を救ひ空しく長蛇を逸してしまつた。

正成更に馬首を和田山方面にめぐらし、尊氏の本營を寶滿寺附近に襲ひ、賊魁を獲んと奮戦した。賊軍之を見て大將危うしと赤松島津の勢は脊後より、直義の隊は其の側面を要撃し、楠軍は三面に敵を受け、其勢殆んど盡きた。正成一方の血路を開き、義貞と對戦せる敵の脊後を衝かんとして、軍を東に轉じたが、少貳の軍勢其の前を遮り細川の兵又正成に迫り復脊皆敵となつた。正成今はこれまでと、湊川北方の一民屋(或は高嚴寺ともいふ)に入り、弟正季と七生滅賊を誓つて遂に相果てた。一族郎黨七十三人皆主人に殉じて自刃した。正成四十



三弟正季三十二歳。

義貞は生田森附近に退却して、賊を反撃し、大館、江田、菊池等の諸將又よく戦つたが、衆寡遂に敵し難く後退、丹波路より京都に歸つた。(日本戦史集)

第二十三 新田 義貞

史 眼

一 楠木正成歿後の義貞

正成の戦死は公家中興の御運に取つて一大打撃であつた。そして正成の死後天皇を翼賛し奉る大なる勢力が新田の一族従類であつたらう。其の天皇の股肱と頼まれし義貞は、北越の轉戦遂に利あらずして藤島原頭の露と消えしことが、如何に天皇の宸襟を痛ましめ奉つたらう。死んで行く義貞の胸中また如何に悲しいことであつたらうか。

義貞優詔を拜して感激の涙止めあへず、北國に下らうとした時、日吉大権現に社参して、

源家重代の鬼切丸の太刀を捧獻して祈願したといふ太平記の記事は、義貞勤王の志の如何に堅きかを物語るものである。

二 吉野朝について

南北正閏論はもう古い。現今の教科書は南朝とも北朝とも言はず、舊教科書の光嚴天皇をも載せてなく、又光明天皇と申上ずに光明院と書いてある。即ち天皇は唯御一人で後醍醐天皇より後村上天皇後龜山天皇となつてゐるので、是程審重に書かれてある現教科書に殊更に南正北閏の辨を費す必要はないのである。

金崎城の落城に當り、尊良親王の御態度の御立派さは、何と申すべき言葉もない。

「義顯感涙を押へて、加様に仕る者にて候と申すもはせず、刀を抜いて逆手に取直し、尤の脇に突立て右の脇のあばら骨二三枚懸て搔破り、其の刀を抜て宮の御前に差置て、うつぶしに成つてぞ死にける。一宮やがて其刀を被召御覽するに、柄口に血餘りすべりければ御衣の袖にて刀の柄をきりくくと押卷せ給て、如雪なる御肩を顯はし、御心の邊に突立、義顯が枕の上に伏させ給ふ」(太平記)

皇太子恒良親王の御最後も御立派であらせられた

「義貞義助、柚山を出て連りに數城を抜き兵勢大に振ひければ、尊氏は弟直義と共に大に怒りて曰く「是れ東宮の言を信じて柚山を緩うするの故なり」と、乃ち粟飯原氏光に命じて鳩殺しまつらしむ、氏光藥を齎らし謁して曰く、「幽居齋陶、恐らくは病を生ぜん、直義臣をして藥を獻ぜしむ」と乃ち一包を留めて還りぬ。成良親王曰く「未だ病まざるに藥を進むるは、是れ我を愛するなり。豈人を愛して一室に幽閉するものあらんや。是必ず死を速くの毒にして、病を療するの藥に非ざるなり」と、將に之を庭に擲たんとす。恒良親王、手づから之を取りて曰く「尊氏、直義慘虐を性とす、たとひ此の藥を飲まざるも、死を免るゝの理なし。一室に鎖されて天日を見ざらんよりは、寧ろ早く死を取らんのみ」と、是に於て毎日經を誦し、佛を念じ以て藥を飲み、幾もなくして薨じ給ふ、時に年十五」

(太平記)

成良親王も亦同じく弑せられ給ふ。

三 人物批評は慎重なれ

近時、歴史上の人物を批判するに、其の人物の生活せる時代、或は其の境遇等に即して評論する事史學家の間に試みられ、段々流行して小學校の國史教授にまでこの方法に傾向せられるやうになつた。

この論評の方法は獨斷に陥るを防ぎ、其人物の史實に即するのであるから、至極結構な事に思はれるが、この長所があると共に又あまり原文により過ぎると、少くも小學や中學の生徒などには、「正」とか善とかの判別を朦朧とさしてしまふ缺點がある。小學中學に國史を課してゐる最も大事な目的を弱めるおそれがあるのである。

例へば足利尊氏なども、彼れが武家政治を始めたのは、父祖傳統の精神に生きんが爲めであつたとか、或は足利の置文だとか、祖父がこの置文の實現を八幡大菩薩に祈つて自殺したとか、だからこの家庭に育てられた尊氏であるから、心ならずも後醍醐天皇の恩義に叛いてしまつたのだ、彼が延元四年先帝の冥福を祈つて京都に天龍寺を建て、懺悔したとかの史實によつて、彼の歩んだ道もまた已を得ないものがあつたんだなど言ふ人もないでもない。それは彼の行爲を彼の境遇に即して辯護したと言ふもので無罪放免にはならないのである。苟

も日本臣民として君恩に叛き、一天萬乗の君に對して弓を引いた尊氏の、又自ら手を下したではないが護良親王、恒良親王、成良親王の三皇子を弑し奉つた大逆罪は亡びるものでない。個人として如何に美しい徳を持つてゐても、日本臣民として大義を謬つた者は、何の顧慮する處なく、糾斷を加へて置くのが、少くも小中學の國史教授の本務である。

四 日本婦人の精神

爪生保兄弟の母の偉いのも、大に附説すべきである。

日本の女性には表面のしとやかさの裡に、男子も及ばぬ凛々しい所がある。二人の子を失へる悲嘆を押隠して、残る三人の子を君の御用にと進める其の雄々しさ、確かに日本婦人の龜鑑である。

史料

尊氏豊仁親王を立て、天皇と稱す

親王は持明院統の後伏見天皇の御子である。尊氏賊名を逃れんとし、北條氏の故智になら

ひ妄に皇族を犯して私利を護るものである。

後醍醐天皇義貞に詔し給ふ

皇太子を義貞に奉ぜしめ給へる叡慮は、天皇京都に還幸あらせられて後義貞等に朝敵の名を負はしめられんことを御深慮あらせられての御謀であつた。天皇の京都御還幸は始めより新天皇に御讓位の御意志あらせられず、當時叡山の糧食盡き外援亦全く絶えたるの際なれば、天皇は諸皇子に股肱の臣を附させられ、各地方に下つて義軍を起さしめ給ふの間の假の御還幸であつた。且つ豫め讓位強請の事あらんことを叡慮あつて、模造の神器さへ御所持になつたのである。すなはち、どこまでも正統の天子を以て任じなかつたのである。

北畠親房は尊澄法親王を奉じて伊勢、四條隆資は大塔若宮を奉じて河内、和泉紀伊。

義貞は皇太子恒良親王及尊良親王を奉じて越前。

北畠顯家は先に義良親王を奉じて陸奥に居つた。

天皇吉野に行幸し給ふ

尊氏は果して天皇を花山院に幽し奉り、三種神器を新天皇光明院に傳へ給はんことを迫つ

た。天皇すなはち偽器を授けられ、花山院にいますこと二月餘で、ひそかに神器を奉じて出で給ひ吉野に行幸になつた。吉野の吉水院の僧兵や楠正行及其の殘黨吉野の行宮をお守り申し上げた。

義貞木目峠で風雪に苦しむ

義貞の軍は叡慮を畏み、比叡山から近江に出で琵琶湖の北岸を過ぎ、近江越前の境なる木目峠にかゝる頃は、もう十二月半であつた。北海から吹きつくる風雪は實に知らぬ人は想像することが出来ぬもので、目を開くことさへ叶はず、四五間離れて人の顔が判らぬ程の猛烈な吹雪が、何日も續くことが珍らしくない。

中にも河野の一族云々とあるのは、伊豫の河野氏である。四國生れの兵士がこの大風雪に逢つたのだから、其行軍の悩み方は一層ひどかつただらう。自殺するにも指が凍えて利かなかつたので、やむなく刀を雪に支へさせて、其上に伏してやつたと傳へられある。

義貞等敦賀に着く

漸く敦賀に着き金崎城カナザキに入つた義貞は、長子義顯を越後に、弟義助を杣山に遣はして義兵

を集めんとした。義助が柚山城に到着して、城將爪生保兄弟に王事に勵むやうに諭して近國の兵を集むる處に、斯波高經の兵二萬餘騎、金崎城を攻撃中との報を得、長子義治(十三歳)を柚山の城主として、自ら手兵を率ゐて救援に赴いた。越後へ向つてゐた義顯も亦此の報を得て、軍を還して共に金崎を援ひ官軍大に勝つたが、尊氏斯波の敗報を聞いて、直ちに高師泰を遣し又海路鹽谷高貞に兵船五百を以て攻めさせた。しかし金崎城は三方は海、一方は山に連る天險だから却々落ちなかつたが、兵糧が乏しくなつた。

柚山城にある義治は金崎を再び援けんとして、瓜生保、其弟義鑑等を遣したが高師泰の軍と戦つて、二人共戦死した。

金崎城遂に陥る

義貞義助は今は城内糧食盡きて、軍馬を屠つて食ふ様を見て、一度城を出で、外より敵の圍を破らんと、夜に乗じて城を出で柚山に到り兵を集めてゐる中、金崎は遂に落城してしまつた。そして長くも尊良親王は義顯と自刃し給ひ、皇太子は賊に捕はれなかつた。

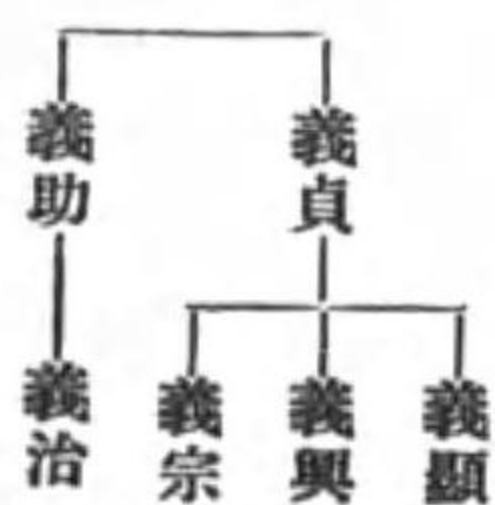
義貞の戦死

義貞は柚山に居ること半歳、しきりに賊を破り、府中(今の武生町)をしたがへ、勢やゝ振つた。そこでこの勢を以て敵の本據足羽城(今の福井市)を衝かんとし、六千騎を率ゐて出



發したが、足利高經は城外に七塞を築りて之を防いだ。

義貞藤島方面の戦闘意の如く進まないのを知り、自ら五十騎を具して赴き救ひ、遂に亂戦の間に惜しくも斃れた。



第二十四 楠木正行

史眼

一 吉野朝補弼の臣

吉野朝の御威勢日に縮り、所謂南風競はざるの中に、新田義貞義顯先づ北越の露と消え續

いて陸奥の明星北畠顯家また地に隕ち、秋風落莫を嘆する間もなく後醍醐天皇の崩御となつた。此の際に當り北畠親房南朝の柱石を以て自ら任じ、入つては幼帝を守つて樞機に參じ、出ては東國を經略して遂に南朝を支持し、軍陣驛旅の間によく神皇正統記を著はして、迷へる者に臣子の分を鼓吹せる、六十三年の生涯は誠に南帝補弼の臣として實に第一等の人であつた。

二 父を恥かしめぬ子

大楠公を父とせる正行、正時の忠節は、哀へ行く吉野朝を飾る花であつた。正行父の志を繼ぎ母の庭訓に順ひ、十四歳にして一族を率ゐて芳野宮を衛りしより、攝津和泉河内に兵を出してよく勝を制せる武略は以て父を辱しめず、而かも陣中敵を救つて敵をして其の仁徳に感ぜしめた廣寛の度量は、以て我が武士道の精華を發揮せしものであつた。

教科書は年代を追はないで、人物中心に書いてゐるから、どうかすると兒童は其の事件と年代との間に連絡を斷たれて、『時の移行』に對する史的考察を缺く恐れがある。教授者はよくこの間に處して、其の陥り易い處を救ふ用意がなくてはならぬ。

三 對立の世相

世相は今や對立的抗争の氣運を現して來た。申すも長き事乍ら吉野朝の大覺寺統に對して、持明院統の思召が圓滑であらせられず、足利尊氏と弟直義との間にいつしか溝が出来て、醜い兄弟の争を暴露し、宮方武家方の對立の外に、新らしく尊氏方直義方ともいふべき對立が出来、國を擧げて各信する主人に相馳せて相争つた。

この世相は果して何物を齎すものであらうか、對立の均衡を破るには、一方が著しく盛になつて他を併合するか、或は二者共に碎けて新らしい第三のものを生ずるかでなければ落付かない。即ち世相の進展を促すものはこの二つの途しかないのである。

史料

靈山城

岩代國、今の福島市の東方にあつて、靈山神社あり北畠親房顯家を祀る。

顯家戦死

後醍醐天皇吉野に潜幸あつてまもなく(延元々年十二月)、勅書を顯家に賜つて速に兵を率ゐて京都を攻しめ給ふ。乃ち顯家義良親王を奉じて、延元二年靈山城を發した。此時尊氏の長子義詮鎌倉にゐて、兵を利根川に出して防いたが、官軍之を破つて武藏に入る。之を聞いて新田義興は兵を上野に擧げて顯家に應じた。此義興といふのは義貞の子で義貞や義顯が北地に轉戰中、郷國上野に潜んで居たが、今兵を集めて顯家に應じたわけだ。

顯家の軍大に振ひ、遠江に進んで宗良親王(尊澄法親王)と會して賊將上杉憲顯を美濃に破り、伊勢より奈良に到る。尊氏大に驚き大軍を發して之を撃つた、顯家の軍敗れ、轉じて天王子、堺浦に於て賊將高師直と戰つて又敗れ、遂に和泉石津に於て戦死した。義良、宗良の二皇子は吉野に入らせられ、義興は又東國に歸つた。

後醍醐天皇の崩御

延元四年八月、天皇御腦あつて月の十五日皇子義良親王に御位を御傳へになり翌日遂に崩御しました。

「……主上苦しげなる御息をつかせ給ひて、一妻子珍寶及び王位。命終る時に臨んで隨ふ者

不き」は、是れ如來の金言にして、平生朕が心にありしことなれば、秦穆王が三良を埋み始皇帝の寶玉を隨へし事、一も朕が心に取らず。唯生々世々の妄念ともなるべきは朝敵を悉く亡ぼして四海を泰平せしめんと思ふ許りなり。

朕即ち早世の後は、第七の宮を天子の位に即け奉りて、賢士忠臣事を謀り、義貞義助が忠功を賞して子孫不義の行なくば、股肱の臣として天下を鎮むべし、之を思ふ故に玉骨は縱令兩山の苔に埋むるとも、魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕んぜば、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず」と委細に綸言を残されて、左の御手に法華經の五卷を持たせ給ひ。右の御手には御劍を按じて八月十六日の丑の刻に遂に崩御なりけり。(太平記)

關城

常陸國眞壁郡大寶村にあり、關宗祐の居城である。當時東國に於て官軍の勢を得しは常陸地方で、關城の外大寶城(下妻政泰)や、伊佐城(伊達行朝)なども皆親房に應じた。

神皇正統記

この書に記述せる所は、上は神代より下は後村上天皇に及び、南朝の正統たる所以を明にし、北朝を以て僞王となし以て勤王の志氣を鼓舞せんとした著述であつた。今次に其の一節を録して、親房の忠烈を想ひ見る。

『さても舊都には戊寅の年の冬改元して曆應とぞ云ひける。吉野の宮には本の延元の號なれば、國々にも思ひ思ひの號あり。唐土には斯かる例多けれどもこの國には例なし。されど四年にもなりぬるにや、大和島根は本よりの皇都なり。内侍所神廳も吉野に座しませば、何處が都にあらざるべき。……この君聖運ましまし、かば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣をさだめさせ給ひぬ。功もなく徳もなき盜人世に起りて四年餘りが程、宸襟を惱まし、御世を過ぐさせ給ひぬれば、御怨念の末、空しく侍りなむや。今の御門また天照大神より己來の正統を受けましましぬれば、此の御光に争ひ奉る者やは有るべき。』(神宮正統記)

親房がこの書を著せるは延元々年の秋で、更に増補訂正したのが、後村上帝の與國四年七月、關城當に陥らんとする時であつた。

軍陣蒼忙の中唯一卷の最略皇代記といふ文書を参考書として、公平なる評論と流暢の筆を馳せて、國家の治亂興亡を叙せるは實に敬服すべきことである。

正行天皇を拜す

天平二年十二月、尊氏は九月以來天王寺(細川顯氏大敗)及瓜生野(山名時氏大敗)に於ける敗戦に驚き、高師直師泰に兵六萬を授けて正行に向はせた。

「京勢雲霞の如く、淀、八幡に着きぬと聞えしかば、楠帶刀正行、舍弟正時、一族打ち連れて、十二月二十七日芳野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは「父正成厄弱の身を以て、大敵の威を碎き、先帝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す處、兼て思定め候ひけるかに依りて、遂に攝州湊川にて討死仕候ひ訊りぬ。」

其時正行十三歳に罷りなり候ひしを、合戦の場へは伴はで、河内へ歸し「死残り候はんする一族を扶持し、朝敵を亡ぼし君を御代に即けまゐらせよ」と申し置きて死して候、然るに正行正時己に壯年に及び候ひぬ、此度我と手を碎き合戦仕候はずば、且つは亡父の申

し、遺言に違ひ、且つは武略の言甲斐なき誇りに落つべく覺え候、有待の身、思ひ任せぬ習にて、病に犯され早世仕る事候なば、唯君の御爲めには不忠の身となり、父の爲めには不孝の子となるべきにて候間、今度師直師泰に懸り合ひ、身命を盡し合戦仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行正時の首を彼等に取りられ候か、其の二の中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らんために參内仕りて候ふ」……

主上南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく、諸卒を照覽ありて、正行を近く召して「以前兩度の戦に勝つことを得て敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰するの候、累代の武功返すくも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦手を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知りて進むは時を失はざらんが爲めなり、退くべきを知りて退くは後を全ふせんが爲めなり。朕汝を以て股肱とす慎みて命を全ふすべし」と仰出だされければ、正行頭を地につけて、兎角の勅答に及ばず、唯之を最後と思定めて退出す。(太平記)

第二十五 菊地 武光

史 眼

一 菊地家の家憲

楠木氏新田氏相次で王事に斃れし後、未だ勤王の義氣衰へざるは唯九州の菊地の一族あるのみであつた。

菊地の家には代々尊王の大義に當つて敢然として難に赴くといふ、義烈の血が流れて居るやうだ、世に傳る高祖隆家が三條天皇立后の儀に當り、群臣皆關白道長の威を憚つて(中宮が道長の女であつたから)參朝する者のないのを見て、『天に二日なく地に二王あるべからず、豈權臣を懼れて朝命を忽にすべけんや』と、則ち小野宮權大納言等數名と參朝して、立后の式を擧げたといふ話があるが、大節に臨んで奪ふべからざる『豈可懼權臣忽朝命哉』の氣魄が代々菊地の家に流れて居るやうに思ふのである。

二 父母凛烈の氣を享けし武光

菊地武時が百五十騎の小勢を以て、探題北條英時を襲ふ義氣に比べて、少貳大友が違約して昨日の敵に媚を呈する陋劣は、當時の私利を貪らんとする時代病の一證と見られる。

世人多く楠公櫻井驛の訣別を賞して、この菊池父子のそれを看過せんとするは當らない、『父は義の爲めに命を殞す、汝もまた義のために再擧を謀れ云々』と、大義の爲めに紛々たる情緒を切斷する所の偉大さ、實に楠公父子の訣別と並べ懸る東西双璧である。

而して武光に至つては、父祖二代のこの遺芳を承け、加ふるに母方の祖父に有名な赤星三郎有隆を持つて居る、彼の全身に漲るもの、唯是れ義烈、唯是れ勇猛そのものでなければならぬ。文政の詩人山陽が『殉國劍傳自乃父』と叫べる所以であらう。

三 菊地兄弟の至誠

菊地兄弟が如何に天朝に對して至誠を致せるか、次の願文や神文を見ても分る。

- 一、天下の御大事は内談の議定ありと雖も落去の段は武重が所存に任ずべし。
- 一、國務の政道は内談の儀を證とすべし。武重すぐれたる儀を致すと言ふとも、内談衆一統せずは武重

が儀を棄てらるべし。

一、内談衆一統して堅くそらごとを禁じ、五常を守り家門末代に傳らんことを願ふべし。
謹んで八まん大ぼさつのめうしやうを願ひ奉る。

延元三年七月廿五日

藤原武重花押

武重の弟對馬守武茂もまた、鳳儀山聖護寺に神文を納めてゐる。

一、武茂弓矢の家に生れて、朝家に仕へ奉る身たる間、天道に對し正直の理を以て家名を揚げ朝恩に浴し身を立てんことは、三寶の御ゆるされをかうふるべく候、其外私の名聞利欲に義を忘れ恥をかへりみず、へつらへる當世武士の心をはなるべく候。

一、私欲のため、あるひは親疎によりて五常の道にそむくべからず候。

一、公法出仕の外、私のまじはりには名聞榮花を嗜み好むべからず、當世不實者のふるまひをなし、文武にはづれて國家のつゐえたらんことをかたく停止す。

一、舍兄肥後守子々孫々にまで、いましめを定置き候趣を、武茂も堅く相守りそむかざるやうにねがひ候。

此趣違背に於ては日本の諸神の御罰をかうぶるべく候。

延元三年八月十五日

藤原朝臣武茂花押

「天下の御大事」といひ「朝恩に浴し身を立てん」といふ、大義名分の雰圍氣が、如何に

菊地一家に濃厚であつたか、而して此の一念を貫かんが爲めには、家長自ら之を任とし「落去の段は武重の所存に任すべし」と群議を押へてゐる。

四 父の戦死を聞く菊地一家

元弘三年父武時が博多に戦死した時、武光は幾歳頃であつたか、父の出陣には長男武重の外三男頼隆四男隆寂までが伴はれて居る處を見ると、當時武光は元服前であつたらう。武光の病歿は文中二年となつて居るが、行年幾歳といふことが判明しない。しかし文中二年から年を繰つて見ると、元弘三年は正に四十年前だ、それに武時の戦死が四十二歳であり、其の第十子が武光である所から考へても、ほゞ元服以前といふ推定はつく。

博多の凶報を齎して歸つてきた嫡男武重の悲痛の色を見た時の母の胸中は、誠に察するに餘りある。夫を亡ひ同時に實父赤星有隆をも失へる夫人は、まだ十歳かそこらの末子武光に何を語つたらう、戦國の女として、菊地家の夫人として。

史料

菊地家

群書類聚によれば、藤原隆家(道長)の曾孫則隆と言ふ人が、後三條天皇の延久二年九州菊地郡に下向すとある。すなはちこの則隆以後菊地を姓としたものと見える。

則隆土着以來、代を重ねること十代、年を経ること二百二十一年にして武時が生れた。即ち武重、武敏、武光等の父である。

則隆十世の孫がこの菊地家中興の祖武時であるが、武時の祖父武房は、彼の文永弘安の蒙則襲來に當つて、一族郎黨を率ゐて博多に驅けつけ、殊勳をあらはして幕の御紋を下さるといふことが見える。(菊地傳)

また武房の叔父有隆は弱冠軍に従ひ、身に敵箭を受くれども屈せず。

流血染衣如赤星、因勅不改前衣、入于禁闕、爾來可菊地稱赤星、賜獅子王御劍。

とある。この有隆が赤星の祖先と言へる。しかも其の姓たるや、戦功を物語り、畏くも勅命によるところ、武家の本願實にこの上もない名譽と言ふべしだ。

有隆が幾歳位で軍に従つたのか判然しなが、多分武時の父時隆等と餘り年が違はなかつた

ではないか、といふのは此の有隆の女が武時の夫人、武重等の母になつてゐるからである。

武時には男子が十人もあつた。武光は實に其第十子で、初め豊田十郎と稱したが、兄武重の子武士たけひと病身で出家遁世の後、入つて宗家を繼いだ。

武光の兄武吉たけよしは、建武三年の湊川の合戦に、楠氏一族と共に節に殉じて居る。

實に菊地家の繁榮と光彩は、武重、武光の代に至つて最も光芒を顯し出した。而して其の十人の兄弟は、皆大節に當つて志を一つにし、或は出で、吉野の宮を護り、或は宗家の藩屏となつて對馬を宰し、或は入つて征西將軍宮を補佐するなど、一人の脱離者をも出さなかつた。

武時の勤王

元弘三年主上隠岐より逃れさせ給ひ、錦旗船上山上に翻ると聞くや、菊地武時は時の九州探題北條英時を襲つた。

「天皇未だ船上に御座ありし時、少貳貞經大友貞宗、菊地武時三人同心して御味方に參るべき由を申上げ、綸旨に錦の御旗を添へて賜つた。この事いつしか探題英時に聞え、英時は實否を確めんと武時を招きいた。

武時「これは事露れて自分を討ちとらん爲めならん、此上は此方から博多へ押寄せて勝負を決しよう」と、少貳大友を誘合せたが、彼等は形勢を觀望して約を履まざるのみならず武時の使を斬つて首を探題に贈つた。

武時怒つて僅に百五十騎を従へ、元弘三年三月急に英時の館を襲ひ、決戦數合、將に英時を獲んとしたが、少貳大友の軍六千餘騎後詰にかゝり來たので、武時「今は是までなり」と、嫡子武重を間近く呼んで「父は義のために命を殞す、汝もまた義の爲めに再舉を謀れ、小信を守つて大義を忘るゝは良將の恥る所、節にあたつて命を奉る、遲速ありと雖も何れか死をまぬかれん」と是非にも一緒に死なうとする子を勵まし

故郷に今夜ばかりの命とも

知らでや人の我を待つらむ

との一首を書き、郎黨五十騎に守らせて還らせ、敵陣を突き主從百騎一人も残らず敵と判し遠へて戦死した。(太平記意譯)

筑後川の戦

武光は先づ父祖累代の怨敵少貳頼尙を鏖滅せんものと、正平十四年七月征途に上つた。史上に名高い筑後河の戦といふのはこれだ。

征西將軍宮を大將軍に押戴き、公卿並新田の一族、侍大將には武光自ら之に當り、一子次郎武政、一族には肥前次郎武信、同孫三郎武明、赤星掃部亮武貫、其の勢八千餘騎、これが武重以來錬りに錬つた精銳を盡したと言つてもいい位だ。

かくと知つた少貳方も、太宰府に勢揃をなし、松浦、島津、鹿子木の兵を合せて六萬の大軍肅々として南進し、筑後河の右岸杜の渡を前にして陣を布いた。

菊地勢は、高良山、柳坂に據つて戦機の熟するを待つたが、遂に七月十九日、筑後河を渡つて少貳の陣に討入つたが、敵は急ぎ陣を後方三十餘町の大保原オホホリに移し警戒最も努めた。

それから兩軍對峙すること約一ヶ月、八月十六日の夜に到つて戦闘の幕は切落された。すなはち菊地方から忍入つた三百餘の夜襲隊が、三ヶ所に火を放ち其儘後方に廻つて鬨の聲をあげたので、敵は驚愕して同志打を始め、戦運漸く來つた。

此の機を逸せず、第一隊の兵を指揮する嫡男武政生年二十歳、一千餘騎を以て突入した。

夜の引明けに卯の花緘の鎧の袖を返し、馬上に叱咤する若武者の英風想ひ見るべしだ。

續く武信武貫の一隊、武政の隊の横合より攻め掛れば、少貳忠資(頼尙の子)同忠泰二萬五千を以て逆撃し來る。一進一退、矢合せ己に終つて將に白兵戦に入らんとす。潮合よしと睨んだ武光は、茲に三千の本隊に令して突撃に移つた。

宮も一隊を指揮されて修羅の巷に進まれる、此時敵將頼尙もまだ松浦島津の隊を前後に率ゐて殺到し、今や筑後河畔は屍山血河、宮は金枝玉葉の御身を以て奮戦、御身に三創を受けられ、之を見た日野、坊城、花山院の公郷、宮を落しまゐらせんと、身を以て楯となし戦死相次いだ。

武光この報を得、馬を乗り廻し『何の爲めに惜しむ命ぞや、日頃の契約を忘れずば、吾武土共残らず討死せよ』と。大聲疾呼すれば、我も我もと馬上に敵と組み、組んで落ち落ちて刺違へる。

武光の鎧は堅牢だつた爲め矢は通らなかつたが、二個所に刀創を負ひ兜も打ち落されたが敵將少貳新左衛門と組んで落ち、首を掻斬り馬と胄を取つて奮戦した。

此戦敵の少貳忠資を斬り、同忠泰を擒にし一族の敵將二十餘人、兵三千六百餘人を討取つたが、味方も亦武明武貫を亡ひ、士卒千八百人を失つた。しかし十倍の敵と戦ひこの勝利を得たのは、武光の武略の尋常ならぬことを證明して餘ある。況んや野戦に於てをやだ。

●挿 畫

沼を隔て、手前は菊池の備、騎馬の將は先陣の武政、旗の上に結べる紙片は少貳方よりの起請文(去年頼尙が一色氏に攻められ危かりしを武光に助けられし時、子孫七代まで菊池の家へ弓を引かじとの血書)にして敵を恥かしめし圖なり、向ふに見ゆるは高良山。

第二十六 足利義滿

史 眼

一 義滿の功罪

尊氏以来の内訌を一掃し、足利幕府の威容を兎も角も整へたのが三代義滿であつた。其の陰には細川頼之の内助の功最も多かつた。そして外に對しては、驕慢なる山名一族を膺徴し、

更に後龜山天皇の還幸を奏請して多年の兵亂を収めたのは、義滿の功業であつた。

然るに漸く心驕つて豪奢を極め、潜上を敢てし、あまつさへ明主の封冊を受けて國體を傷くるに至つては、義滿の罪や許すべからざるものがある。

二 時勢の運行

『時勢』の大きな車はたへず運行する。對立の世相はだん／＼と合一の運命へと歩んで行くのが見える。

尊氏は直義と争つた時に一時吉野の朝廷へ降参した。又直義の養子直冬と義詮と兵を交ふるや、直冬は吉野へ降つた。其他尊氏や直冬の部下が幾度か勢窮しては吉野に走るといふ有様で、吉野は彼等の避難所の如き觀を呈した。

然るに時の移るに従ひ、足利氏の勢力父祖にまして強大となるに反し、吉野朝また昔日の北畠楠新田菊地の武威なく、唯群少が私利の爲めに來つて吉野を煩はすに過ぎない有様となつた。即ち對立の勢崩れて合一の機將に熟せんとしてゐる。

後龜山天皇、義滿の奏請を嘉納せられて、神器を後小松天皇に御譲りになつたのは、『時勢

の運行』を御洞察せられた御事であつた。教科書に「人民のながく戰亂に苦しむをあはれみたまひ其の請を許して京都に還幸」と書いたのは、優れた筆の運びである。

三 補正儀論

こゝに至つて補正儀の心事を考へて見たい。正儀はこれまでの歴史に於ては不肖の子として時には指彈せられた。

如何にも彼の父彼の兄は吉野に歴仕して、父は「七生人間誅此賊」との悲壯の最後を遺して死んで行つた。兄は「君の御爲め不忠の臣となり父の爲めには不孝の子」となることを恐れて戰死を遂げた。この家訓に人となれる彼でありながら、累代の敵に降つた表面の事實のみを見る人は、不肖の子とも家名を汚せる行とも見るであらう。

しかし「時」は已に父や兄の「時」でない、相對立して互に争ふ爲めに大局は愈々紛糾し、私利を謀る奸惡の徒輩は之を奇貨として累を皇室にかけ奉つてゐる。父や兄やは公家御一統の政治實現のために、其の犠牲となつたのであるが、「今の時」に武家——足利氏——の勢力を無視して傳統の精神を實現すること果して可能であるか、「今の時」に處して君の爲め民の

ために最もよく善處するものは公武の合體にあると、彼は考へたのであつた。この理想を實現せんとして彼は細川頼之に謀る所あつた。そして遂に彼は父祖傳來の家訓に叛いて降を足利氏に容れた。

しかし「時」はまだ早かつた。彼の志は報いられず、彼は對立から合一への犠牲となつて世を終つてしまつたのである。

四 無學の驕兒

足利義滿の驕奢、一見藤原道長のそれと似通つてゐる。しかし彼の此の威嚴欲は、足利幕府の威權を示して、父祖代々苦しんで來た部下群雄の跳梁を抑壓せんとした、唯一の方法であつたとも考へられる。この點は頼朝が官位の進むを辭し、華を排して實を採りし手段と非常な差である。考へて見れば止むを得ない事であつたらう。すなはち鎌倉幕府の當時は頼朝の威望が何の苦もなく部下諸將を統御して、事が運べたのに反し、足利幕府は尊氏以來諸將の歡心を買ひ、漸く續いて來たのであるから、部下は功を恃んでよく服従しなかつた。それを義滿が統御するのだから、成るべく自分に金箔を附けて威赫する手段を採つたので

ある。明王から「日本國王」など言はれて金箔が愈々光つた位に思つたのであらうが、さりとて彼も亦案山子の絆であつた。

史料

尊氏の兄弟主従の不和

直義は性奸智に長じ兄を補けて延元以來足利氏の勢を強大にした。所が高師直兄弟は尊氏の重臣で且つ度々戦功があつたので尊氏の信任を得て心大に驕つてゐた。この直義對師直の關係が漸く險惡になつて、諸將士も二つに分れて争ふ事になり、尊氏は止むを得ず直義を退げた。しかしそれ許りでは争がやまないで遂に直義は兵を擧げて師直兄弟を殺した。

其後一時兄弟の間小康を得たが、部下の將士尊氏と直義の和合を喜ばない者多く、遂に再び兵戦を交ふるに至り、尊氏の軍は近江越前、伊豆の各地に直義の軍を破り、直義は降参したが、尊氏之を鎌倉で毒殺してしまつた。

細川頼之

細川氏は足利の先祖義康の子義清が細川氏を名乗り、頼之は其の六世の子孫に當つてゐる。文武の才あり尊氏義詮二代に仕へて功があつた。正平二十二年義詮病篤く命を終るに臨んで頼之を呼んで子義満を托した。

義詮公幼君義満に謂つて曰く、我爾に一父を與へん、其教に違ふこと莫れと、又頼之に謂つて曰く、爾に一子を與へん保護して懈る莫れと。(細川系圖譯)

頼之は義満の左右近習の者が、時に幼君の耳目を迷はし、又相互の間によからぬ風儀の生ぜんことを恐れて、内法三個條を定めて殿中に掲げて戒めた。

一、賤奸の心を以て仰に隨はんが爲めに、不善を以て善なりと言上すること大なる曲事たり(以下略)

二、私の遺恨を達せんが爲……め言を巧にして密かに幼君に訴へ奉ること……幼君を邪路の大穴に墮入奉るの大禍有り(以下略)

三、私用を専とし、遊樂を事とし、位無くして威貴く、身をおごり娑婆羅(奢侈の事を當時言へり)を好む……大に禁すべき事(同上)

後龜山天皇元中年間、山名氏の一族山陽山陰十一個國を領して驕傲であつた。頼之は義満と共に之を討つて其の一族中の巨頭たる者を滅して其の勢を抑へた。

再び武家政治の世となる

始め尊氏後醍醐天皇に叛し、幕府を鎌倉に開かんとしたが、吉野に天皇座したから之に對して京都にはしいまゝに幕府を開き、自ら征夷大將軍と稱して來た。で尊氏や義詮は公に御任命になつた征夷大將軍ではない。今後龜山天皇が御位を後小松天皇にお譲りになつたので、義満は初めて公に御任命を拜した譯で、尊氏のほしいまゝに開いた幕府も亦公認の政廳となつたことになる。

義満の驕奢

(義満の驕奢)頼之傍によつて補佐してゐる中は義満は謹嚴の公子であつたが、長ずるに及んで漸く頼之をうるさく思ふ様になつた。其の機を見て左右の者また離間したので、天授五年頼之は讃岐に左遷された

南海行

人生五十愧無功 花木春過夏已中

滿室蒼蠅掃難去 起尋禪榻臥清風

この詩を以て志を述べたといふ。

即ち頼之の補佐は義滿十一歳の春より二十二歳まで十二箇年に亘つてゐる。

其後の義滿は殆んど反動的に、四年後には久我氏の職を奪つて淳和獎學兩院別當となり、門跡攝家にあらざれば授けられざる准三宮となつた。

其後小松天皇の應永元年三十七歳を以て太政大臣となつて、軍職の方は子義持に譲り、義滿の僭上はいよく募つた。

「應永六年九月相國寺大塔の供養行ふや、寅の時(午前四時)關白(一條經嗣)は松明をとられてまゐりいよく夜明けて義滿の北山殿を出る時に、關白が進んで御簾をかくげ、やがて中門を出る時は親王關白を初め地にひざまづかれたといふ。」(相國寺供養記譯)

自ら日本國王と稱して憚らず

義滿から明王に書を送つたに對して向からの返書には

「爾日本國王源道義心を王室に存し愛君の誠を懐く」とか「寶刀駿馬甲冑紙硯を貢し副ふるに良金を以てす朕甚だ之を嘉す」とか「君臣の道に篤きに非ずんは疇ぞ克く茲に臻らん」など、屬邦視してゐる。

それを恥とせず自ら「日本國王源道義」とか「臣道義」とかと書して明王に對して居た。

(道義とは義滿が難髮してからの名である)

第二十七 足利氏の衰微

史 眼

一 足利氏の諸侯操縦策

足利氏の天下を保つたのは、延元の變以來尊氏が自家勢力の保持に努め、將士の離反を恐れて之に食はしむるに利を以てしたからだ。

之が足利の天下を保ちし譯であつたが、同時に漸く部下諸侯の横行を馴致し、常に足利

氏が惱まされた因を成した。

三代義満はこの弊を感じて、強制自用して當時六分一大名と稱された山名氏を滅し、又大内氏を抑へたが、義政に至つて再び其の威望がなくなり、諸豪の爲めに制せられて一の傀儡に過ぎなくなつた。

加之奢侈を好み秕政は百出して、幕府は人民の怨府となり、遂に家督争に端を發して、應仁の大亂となつてしまつた。

二 將軍は一の傀儡

京都の大亂はやがて其の諸侯の分國の戰亂となり、世は暗黒の戰國時代となつて行くのであるが、足利氏の將軍が其の後衰へ乍らも尙命脈をつないでゐるのは、將軍といふものが全く諸侯の共同の必要物であつたからだ。決して敬意を拂つてゐる譯ではないが、傀儡師が人形が必要だと同じ意味で亡びなかつたのである。

三 應仁の亂は關門より發す

一國の亂れるのも、一家の衰へるのも、關門の頽廢亂脈が専ら其の深因をなすことを我々

が古今東西の歴史を究むる者が等しく感ずる所であらう。

應仁の亂の勃發した端は、義政の夫人日野富子の横議によるのであるが、義政には正妻の外數多の妾があつて關門甚だ治まらず、夫人とは和合しなかつた。此の夫人却々の貨殖家で米倉を建て米穀を貯へて、米價の騰貴を謀つたり、禁裡造營に名をかりて京都七口に關を設け、通行税を取つたり、其の金を大名に貸して利殖を計つたと言はれてゐる。

四 實力本位に向ふ

世は最早や實力の世の中とならうとしてゐる。これまでは官位と榮華とが伴つてゐたが、もう今は官位とか前例とかそんなものはどうでもよかつた。山名宗全が久我大臣から先例がないと言はれたのに對して

「凡そ例とは其の時が例なり、もし古來の文字を今沙汰せば、宗全の如き匹夫は、君に對して如此同輩の談を述べ侍らんや、是はそも何れの代の例ぞや、是れ即ち時なるべし」(塵塚物語)と、先例云々を一蹴してゐる。

そして此の時代人は、富と權力に戀々として恥も外聞もなかつた。苟も自己の權力と利益

とになる事なら、主従の情誼も顧みなかつた。

「天下は破れば破れよ、世間は滅ば、滅べよ、人はともあれ、我身さへ富貴ならば他より一段榮華に振舞はんと成行けり」(應仁記)

五 應仁の亂の長かりし眞因

應仁の亂はなぜ十年とか十一年とかの長きに亘つたか、それは將軍の威令が少しも行はれなくなつたこともさうだが、眞の「合一」の内容が出来て居なかつた爲めだとも考へられる。

義滿が多年の兵亂を解いたのは、表面の作爲に過ぎなかつた、もつと社會の内實に突入つて改造刷新すべきものがあつたものを、彼は自家權威の構成にのみ汲々として居つた爲め、「對立」の姿が一時姿を潜め、それが義政の秕政に刺戟せられて、勃然として湧起し應仁の大亂——大對立となつたのである。

宗全でも勝元でも戰に疲れて、幾度か媾和の意を示して居るが部下の將校が聞かなかつた。聞かないといふのは、彼等はこの對立に乗じて敵國の侵略といふ甘味から離れ難かつたのである。

「文明四年二月宗全和を勝元に求めしに、勝元も之を欲したりしが、其の黨赤松政則之を喜ばざりしかば、容易に成らざりき。蓋し政則は此の大亂の間に自家の舊領とは言へ、現に山名氏の領土なる備前、美作、播磨を取りたれば、和成らば之を返さざる可からざるに由るなり。」(日本歴史集成)

史料

義政少しも心を政治に用ひず

義滿より四代目の義政は義滿の孫で、政務に倦み奢侈に耽つた事は祖父に似てゐる。後花園天皇の寛正二年、室町の邸(花の御所)を更に新築し、巨石珍草を諸國に求めてその結構善美を盡した。

此頃連年諸國に飢饉起り、春より夏にかけて疫病大に流行して、窮民は京都に集つて來て、寛正二年正月より八月に至るまで餓死せるもの京都にて八萬二千人、死骸累々賀茂川にすてられ河水一時塞つて腐臭鼻をついたとある。然るに義政は花の御所の土木を赴し、諸國

に税を課して己れ獨りの建築に楽しんで居た。天皇之を聞召して義政に詩を賜ひ御戒めになつた。

殘民爭採首陽蕨

處々閉じ爐鎖ニ竹扉

詩興吟酸春二月

滿城紅綠爲誰肥

人民より多くの税を取立つ

正規の税の外に、段錢、棟別錢、倉役といふ臨時課税があつた。

段錢といふのは段別によつて割當てた地租には違ひないが、即位式、大嘗會、内裏造營、將軍宣下、大建築等ある場合に、全國或は八國を限つて課する臨時税であつた。

棟別錢は即ち今の戸數割に當る、これも國家の大祭とか大建築等のある時の臨時課税であつた。

倉役は土倉役ともいひ、土倉は土藏で質屋を指した。當時質屋は權門の特別保護を受けてゐたので、營業税を徴收されに。

以上の段錢、棟別錢、倉役は其の税の性質として正しいものであるが、徳政といふ借金踏

倒の暴令を足利幕府は發令するに至つた、徳政は貧者が富者に對する水平運動とも見られるが、當時將軍の財政が如何に窮迫してゐたかを物語るものである。此の徳政を義政は十三回まで發令した。

應仁の亂

義政の怠惰と遊樂と無能とは遂に亂の因子を作り、是と共に當時一般の人心を支配せる個人主義思想はこの亂を更に大きくした。

『應仁丁亥の歲天下大に動亂し、其れより永く五歲七道悉く亂る。其の起りを尋ねるに、尊氏將軍の七代目の將軍義政公の天下の、成敗を有道の管領に任せず、唯御臺所、或は香樹院、或は春日局など云ふ理非をも辨へず、公事政道をも知り給はざる青女房、比丘尼達計らひとして、酒宴淫樂の紛れに申し沙汰せられ云々』(應仁)
大體が察せられる。

義政なほを著をやめず

京都の東山に文明十四年(應仁の亂後五年)より工を起し、十五年に成り庭中に銀閣を建

てた。

庭園に敷奇を凝らして茶の湯などに耽つて日を送つたが、此の別荘の建築は應仁の亂後であつたから、税を諸國に課すること出來ず、山城一國に課し石や木は京都の寺社又は民家より取集めたものであつた。

茶の湯は足利義政の頃に盛になり、銀閣の中にも茶室(四疊半)があつた。

茶は源頼朝の頃僧榮西支那(宋)より歸朝の時齋らし來るもので(義政の頃から約二百五十年も前)、採芽調茶の法をも學んで歸り先づ之を筑前に種ゑた。間もなく僧明慧が之を頌ち受けて梅尾に移植し、漸く諸國に擴まつたが、宇治の茶は最も名高かつた。

花の都燒野となる

「計らざりき、萬歳期せし花の都、今以んぞ狐狼の伏所とならんとは。たま／＼残る東寺北野さへ灰土となるを、古にも治亂興亡の習ひありと雖も、應仁の一變は佛法王法共に破滅し諸宗皆悉く絶え果てぬるを感難に堪へず、飯尾彦六左衛門尉一首の歌を詠じける。

汝や知る都は野邊の夕雲雀

あがるを見ても落つる涙は (應仁記)

第二十八 北條氏康

史
眼

一 斯の時代の特色

面白い時代は來た。徒手空拳を以てしても實力のあるものはぐんぐんと自己を發展出來る時代が來たのである。家柄が何んだ、父祖の功が何んだ、やるなら力で來いと言ふ活氣ある時代に廻り合つては、朝廷の公卿とか幕府の將軍とか管領とか、さういふ肩書で事をやらうとする人は、もう凋落の外はなかつた。

「善しと言ひ悪しと言ひ、たゞ苟の上のことぞかし、兎につけ角につけて一つ心を惱ますこそ愚なれ……(一條兼長)」

とか『嘆すべし』だの『悲しむべし』だのと言つてゐる上層階級を後に残して、時勢はどん

どんと進んで行くのであった。

戦國時代はたしかに一國文教の上から言つたら、それは暗黒時代であつたらう。しかし群雄地方に割據して各々自國の勢力を培養する事になつては、武力即ち兵の多寡精粗といふ事が第一に考へなければならなかつたが、國の強弱は兵力ばかりでは行けない。そこで各民政にも心を用ひた、北條氏でも武田氏でも大内氏でも心ある英雄程この方面に力を入れた。民政が改まつて封民が堵に安んずる爲めには、産業を起す事が大切の事になつた。

さうすると、戦國時代約百年といふ長い殺伐な、文明とか文化とかの方面からは顧みられない時代の中に、我國は其の時代に應じた特異の發達をし

武士道は更生して光を放ち

地方色の豊かな民政は發生し

各地の産業が芽をふいたのであつた

二 家の興る時

早雲の堀越御所攻略や、小田原城奪取は、其の手段が誠に亂暴でもあり陰險でもある。武

士道の上からは爪弾を加ふべき所だが、之に乗ぜられた堀越や上杉の當時の有様は餘りに愚物の集りであり、且つは家道も衰へてゐた。扇谷家には太田道灌といふ海道一の智將が居つたが、早雲が小田原を奪つた九年前に、暗愚の定正はこの賢臣を殺してゐる。

家の亡ぶ時は、必ずやこゝにいふへまな事をやるもので、又興る時は不思議に細瑾を顧みなくも、勢が伸びるの例乏しくない。そして二代氏綱はガツチリと家を守り、三代氏康父にも祖父にもまして智あり勇ある孫と來てゐる。家運の隆興する知るべきなりである。

史料

早雲よく時勢を見る

早雲の今川義忠(義元の祖父)にたよつて駿河に來たのは應仁の戦亂中であつた。即ち彼は時勢が實力本位に傾きつゝあるを見、一介の浪人でも己の力量と智謀とを以てすれば、一方の城主とも國主ともなり得る時勢の赴く所を洞見したのであつた。

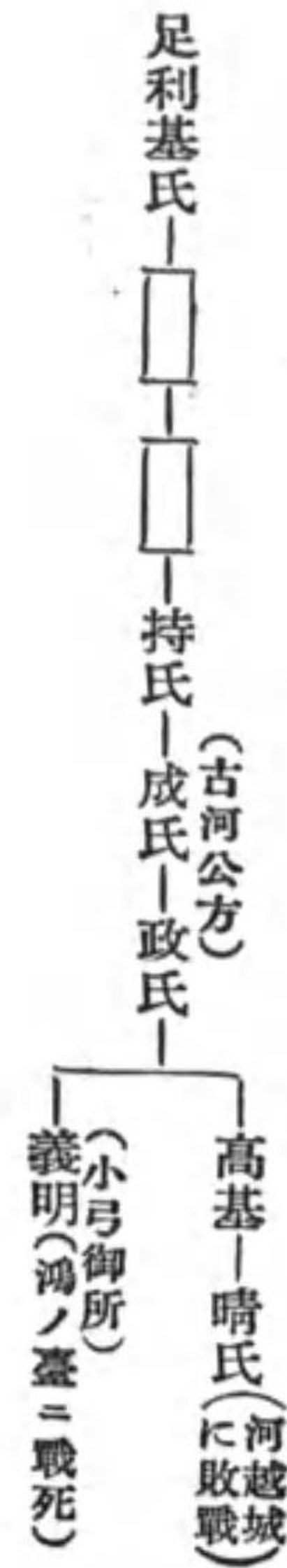
東國の亂れに乗ず

當時關東地方は鎌倉公方足利持氏（實は管領なれども公方と潜稱す）が上杉憲實（管領と潜稱）のために殺され、其子成氏下野の古河にあり、そこで幕府は關東を治むる爲めに將軍義政の弟政知を關東の公方として伊豆の堀越に置らしめた、人呼んで古河御所、堀越御所と言つた。

然るに堀越御所政知に二子あつて、長は先腹にて茶々丸といひ十五歳、次は當腹にて十一歳であつた。政知は茶々丸を冷遇して弟を世に立てんとした。然るに政知の死後茶々丸、繼母及弟を殺して自立した。此頃管領の兩上杉家（扇谷定政）の間に争あつて互に相凌がんとし有名な太田道灌が扇谷家を佐けて戦つてゐた。

この關東の亂れに乗じて伊豆を取り、急に堀越を襲つて茶々丸を自滅せしめた。

○關東公方



○關東管領

(扇谷家)

上杉顯定…(五代略) — 定政 — [] — [] — 朝定 (河越城に戦死)

(山内家)

上杉憲方…(四代略)…顯定… [] — 憲政 (河越城に戦死)

早雲が漂然駿河に來つて今川氏に倚つたのが應仁の戦亂中で、今伊豆を略して菫山城に蟠居したのが、此時年六十歳といふから彼れ此れ十數年の間、彼は虎視耽々其の機をねらつてゐたわけだ。今や伊豆一國の國持になつたが、彼の志は小成に安じなかつた。伊豆は地勢半島をなし、關東に討つて出るには何處かに足溜が必要である。果然彼の目は小田原に向いた。小田原の城主大森藏人は扇谷上杉の屬將であつた。鹿狩に托して突然之を襲つたことは教科書の通り、早雲の子氏綱また武略父に劣らず、其孫氏康に至つて其の智其勇父祖に過ぎ、遂に伊豆、相模、武藏、上野、下總を領有して、戰國強雄の隨一となつた。

鐵砲

鐵砲の傳來は天文十二年であると傳へられてゐるが、教科書に「氏康は十二歳の頃まですこぶる臆病で鐵砲の音を聞きても驚くほど」とあるが、氏康の十二歳の頃と言へば大永七年で、天文十二年を距る十六年前で、其頃に西洋式の鐵砲がしかも關東に有つたとも思へぬが、或は支那の火砲の類かも知れない。

河越城の戦

北條氏の勢日に盛に、堀越御所は早くも早雲に攻め取られたことは既記の通り、小弓御所また氏綱に略取せられ、今は古河御所の晴氏悄然として残る許りだ。

上杉氏を見れば(扇谷)朝定は武州松山城に、(山内)憲政は上野白井城に追ひつめられて餘喘を保つてゐるといふ有様。

そこで、今まで反目してゐたこの兩上杉が同盟し、一方又多年の敵である古河御所に使を立て、三角同盟を結んで、北條氏に當ることゝした。先づ手近の河越城を攻略せんと、聯合軍が十重二十重に取圍んだのであつた。

然るに河越の城將北條綱成は有名な武將であつたから、八萬の攻圍軍によく踏耐えてあつ

た。

七歳の童兒として孤たりしを成長して氏綱之を近臣とせられ……寵愛あまた類なく、既に一方の部將と成て毎度の合戦に手並を顯はし、寡を以て衆を撃ち危に臨んで能く忍び、忠義莫大なりし程に、氏綱家門の席に列し、氏康の妹を以て是に嫁せらる、綱成生得武道に志厚く、毎月十五日宿より潔齋して八幡大菩薩の社へ詣で、冥感を祈ること年を追て怠慢なし。(關東古戦録)

旗は朽葉の地に八幡の二字を墨にて書たり、皆人黄八幡とぞいひける。敵此の旗を見ておそれざるといふことなし。上總守(綱成)合戦のたび度に、黄八幡のはたを眞先にたて、うちわをあげて衆をいさめかつたぞくと計いふ人なり、上總守一しやうがい三十餘度の合戦に、かつたぞくといひて勝利をえたり、味方も此旗先立をみては、勝たりくとおめき勇みたり。(北條五代記)

守るはこの勇將である。氏康河越の急を聞いて自ら八千の兵を率ゐて赴き援けた。

氏康諸軍に向つて曰く、それ運は天にあり、聊命を惜しむべからず、其上合戦の勝負大勢小勢によらず。ただ軍士の心ざしを一味にするとせざるにあり、小敵をばおそれ、大敵をあざむくと老士のいさめも此義もてなり、憲政と近年數度の合戦に及ぶ、時に至つて味方一人を敵十人に心あて、十人は百人百騎は千騎につき、合戦するに一度ふかくとらず、此度の人数と敵を十分にして味方一つは有ぬべし、いまにはじめぬ合戦、其上味方の士卒等一もて千にあたる。氏康が太刀風をば憲政弱兵等さぞ身にしてみて覺ゆらん。(北條五代記)

大將氏康の英風當りを拂ふ慨がある。そこで寡を以て衆を討つは夜攻めこそと、鎧の上に

白紙を肩衣のやうに掛けて目印とし、敵の首は大將の外取るな、引揚の螺貝を聞いたら速に集るべしと、午前一時哄と押寄せ、氏康も長刀を振つて獅子奮迅の勇を示せば、兩上杉の旗本崩れ立つた。

城將綱成櫓の上から之を看取し、城門を開き例の黄八幡の旗を靡かせて、『勝つたぞく』と乗り出した。

遂に氏康綱成の一萬にも足らぬ軍勢のため、寄手は大敗し、朝定は戦死し、憲政は越後に走り、晴氏は僅に上野臼井城を保つに過ぎない有様となつた。

第二十九 上杉謙信と武田信玄

史眼

一 群雄攻伐の目的

戦國時代に於ける關東及中部地方の情勢を明にし、北條、武田、上杉の關係を觀る史眼の

養成を忽にしてはならない、地圖も年代の表もすべてこの史眼を養ふの要具である。

次には上杉でも武田でも、其の畢生の目的が天皇を奉戴し將軍を挾んで天下に號令せんとする所にあつたこと、其の目的貫徹の爲めに近隣を討平して足場を嚴重にしようとした。この點が前時代の文明、明應頃の群雄の攻伐と其の意味合が餘程異なつて來た。つまり前時代は我利一片の盲仕合の觀があるが、天文永祿の時代になると、優れた英雄ほど中原に進出しやうとして争つてゐる。つまり時代が漸々として統一の機運に動きつゝあることを證してゐる。

そして誰も天皇を戴いて事をやらうとする所が、日本人獨特の皇室中心の考で、お互は「彼も人なり吾も人なり」の時代思想を抱きながら皇室に對し奉つては特別の考を失はずに支那流の『王侯相將何んぞ種あらんや』の思潮に毒されずに居つた。これが實に日本國民の日本國民たる所以である。

二 英雄の胸中に宿る日本精神

武田信玄、上杉謙信と言へば、小學一年の兒童でも知つてゐる位有名な武將である。この

兩將が面々相對しての川中島の戦を教授するのだから、思ひ切つて英雄の風手に彼等の小さい魂をゆり動かしてやりたいと思ふ。國史は勿論、時代の一張一弛して流るゝ記録ではあるが、其の間に鏤められた珠玉の如き英雄の偉光は小學の國史に於ては最も大切な教材であらねばならぬ。

信玄が三河野田城で病を得て遂に甲府で死んだといふ訃報が越後に聞えた時、謙信が折柄の食事の箸を投じて、『偕もく残多き事かな、惜しき大將を失ひたり、關東の弓矢柱なくなりし』と嘆じたことは教科書にも出て居るが、信玄も亦謙信に深く敬重して居つた。

『謙信は大方日本無双の名大將にて御入候由、信玄入道時々愚拙へ物語にて候』これは信玄に近侍せる僧教雅の書簡として今日に遺つてゐるものである。又彼の關東の野に互に鎬を削つた北條氏康が近臣に向つて語つてゐる。

『謙信のみは受合ひたる上は骨になるまでも義理を違へざるものなれば、謙信の肌着を分けて若き武將の守袋にさせたく思ふなり。我れ明日にも果てなば、後頼むべきは謙信なり』(日本精神研究)

眞にこれ『英雄たゞ英雄を知る』と言ふものだ。

史料

謙信の生ひたち

少年時代

長尾氏は謙倉權五郎景正の後裔と言はれてゐる。謙信の父爲景は加賀の一向宗の一揆を討ち、却つて敵の爲めに戦死したので國內俄に騒がしく、葬式の時には謀叛人の襲撃に備へるため、當時七歳の景虎さへ甲冑を着けて父の柩を送つた程であつた。

景虎は父の命により六歳より、春日山城外の禪利林泉寺に入り、當時高德の譽高かつた天室光育に師事し、學問に勵み禪機に參じ、時に師に従つて諸國を廻つた。

城主時代

十四歳で兄に代り越後に歸つたが、近郡の者共其若年を侮り屢々叛いたが、景虎天資英邁兵を使ふこと敵の意表に出で、遂に下越地方を平定し、十九歳にして長尾家の家督を繼ぎ春

日山城の城主となつた。

天文二十年景虎二十二歳、上杉憲政が來り投じ、管領補佐の綸旨と上杉家の系圖を與へ、自分の猶子となして名を政虎と改めしめ、北條氏に對する報復を託したので、景虎大に感激し、これから兵を關東に出して屢々北條氏と戦ひ、氏康の臣をして「謙信は不動明王と摩利支天とを粉にして煉立てたるが如し」と恐れしめ、毘沙門天の頭字を取りし毘の字の旗稱して刀八毘沙門の旗の向ふ所八州の草木皆靡き伏し、智勇比なき流石の北條氏康をして、城門を閉ぢて戰意を失はしめた。

天下の英雄時代

謙信一生の目的は、北陸道を席捲して京都に上り、天皇を奉戴し將軍を擁して天下に號令せんとするのにあつた。しかも天性の義侠は關東に北條氏を討ち、又村上義清の嘆願に逢つては「若年の某を御頼みの條、武の義理免れ難く」と、遂に武田信玄と相争ふに至つたのであつたが、中原進出の一念はこの四面征戰の間によく遂行し、越中より加賀能登越前を從へ、將に織田信長と相對して輸贏を決せんとする所に至つたが、天正六年四十九歳にして

卒した。

武田氏の家系

新羅三郎義光の子義清武田を姓とし、曾孫信義功によつて甲斐の守護となる(頼朝の頃)以來十五代目が晴信(信玄)

十六歳の初陣

父に従つて信州の海ノ口城(城將平賀源心)を攻めたが城固くして破ること能はず、加ふるに雪さへ降つて來たので信虎は軍をかへした。途に晴信父に乞ふて手兵三百を以て取つて返し、急に城を攻めた。此時城將は武田勢の引上げを見且つ折柄の大雪に油斷して備を撤して居たので、僅か三百の小勢に切立てられ城遂に陥り、源心は戰死した。

川中島の戰の原因

武田信玄の目的も亦早くも京都に上つて、天皇を奉じ將軍を挟み以て天下に覇をなさんとするにあつた。さうするには第一後顧の患なくして西上しなければならぬ。當時信濃の地に諏訪・小笠原・村上等の豪族あり、甲斐の國境の脅威となつてゐた。信玄は之を討平して西

上せんと、天文十二年以來度々兵を信濃に出し、諏訪小笠原(諏訪・郡筑摩郡)を亡ぼし、遂に天文二十二年大舉して村上義清(埴科郡)を討ち、居城葛尾を陥れた。

交 戦

戦國の華とも言はれた甲越二軍の正面衝突である。古來この戦記を物せる甲陽軍鑑或は川中島五戦記等の書、人口に膾炙してゐるが、田中義成博士は川中島の戦弘治元年七月と永祿四年十月の二回と斷言せられてゐる。そして教科書所載の兩將一騎打は永祿四年の戦に違ひない。

さて謙信(當時三十二歳)は精銳すぐつて一萬三千を率ゐて春日山城を出た。従ふ面々には直江山城守、甘粕近江守、柿崎和泉守、本庄越前守、鬼小島彌太郎等百戰鍊磨の勇將であつた。

北國街道を南進して善光寺に到り、こゝに後詰として五千人を留め、自ら八千の精兵を提げて大膽不敵にも海津城を右にして深く敵地に入り、妻女山に陣した。

海津城からの飛報によつて、信玄もまた二萬の軍勢を發して甲府を出た。嫡子義信舍弟左馬助信繁、穴山伊豆守、内藤昌豊、山形昌景、山本勘助、馬場信房、小山田昌時等の何れ劣

らぬ一騎當千の猛將之に従ひ、川中島の西方茶臼山に陣を布き、海津城と相呼應(此間二里)して越軍の退路を斷つた。

かくして數日、信玄は茶臼山の陣を引拂ひ、川中島を横ぎつて海津城に入つた。山本勘助策を獻じて一隊は迂回して妻女山を襲ひ、一隊は敵の退く處を要撃せんことを進言し、信玄默考の末之を贊し、即ちこの啄木の戦法に出でた。

迂回軍は九月九日の月の沈むを待ちて運動を開始した。馬場、小山田昌時、同信茂等を大將とした總勢一萬二千、暗に乗じて行進して行く、他の一隊即ち要撃部隊は、信玄自ら率ゐ、信義、信繁、山形、穴山、内藤の諸隊、川を渡つて八幡原に陣し敵を待つた。

之より先き謙信は、海津城内の炊煙盛なるを見、甲軍の策動を知り、部將を集め、

「信玄の武略に、人數を二手にわけ、此陣場へ懸つて合戦をはじめ、謙信が旗本川をこし、引退く所を半分の人數をもて討とるべきことの合戦、鏡にうつらふごとくに見えたり」(甲陽軍鑑)

と直ちに川中島へ進出し、信玄と雌雄を決せんとし、兵は枚を衒み、馬は舌を縛して千曲川

を涉つた。所謂「鞭聲肅々夜渡河」だ。

これが十日の天明まで甲軍の知る所でなかつたが、やがて朝霧の散ぜんとする頃、斥候の報によつて敵軍眼前に迫りつゝあるを知り、甲軍は愕然として色を失つた。

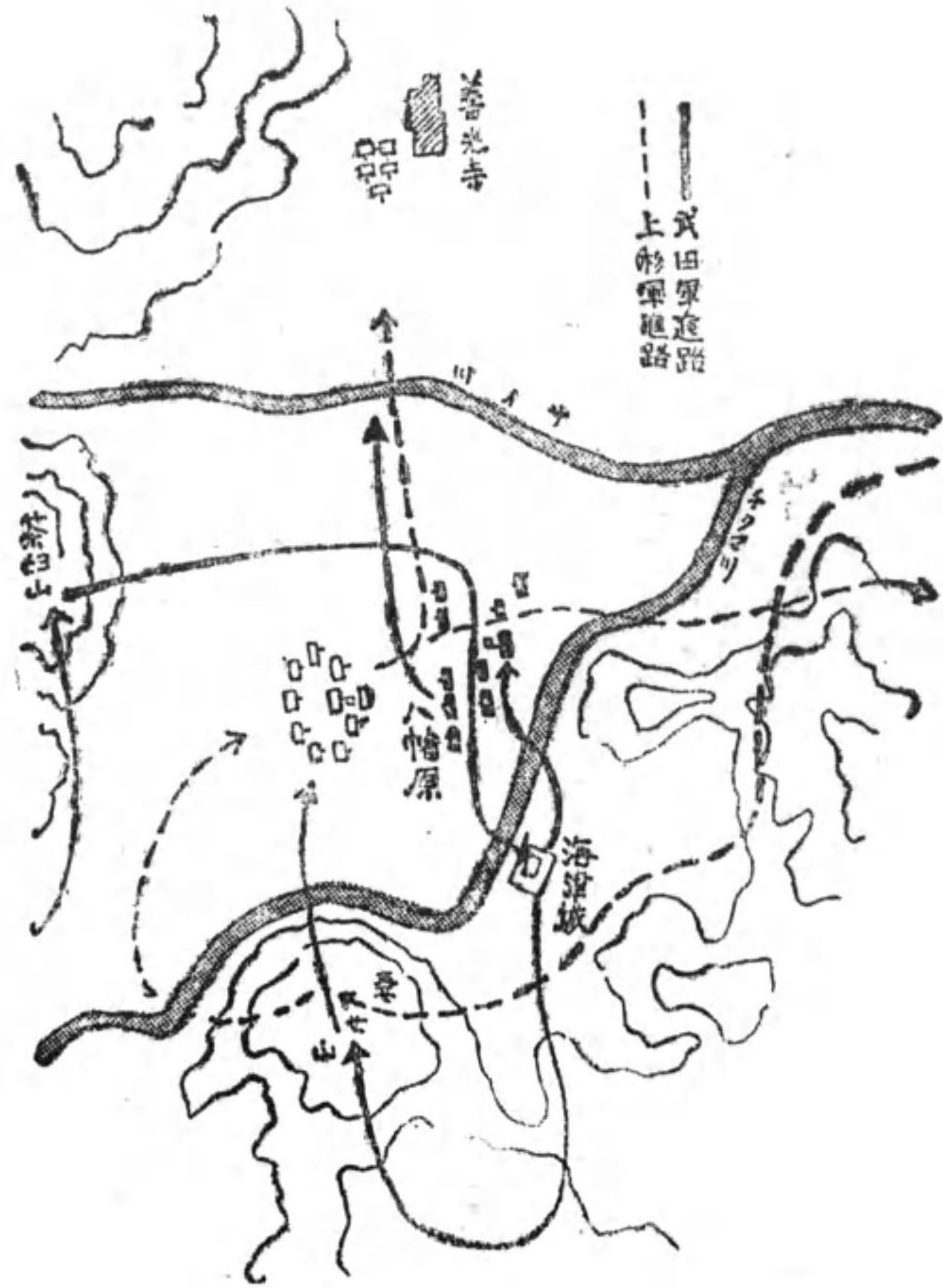
「謙信進軍を命じ、令して曰く、兜を伏して敵を見るな、旗を前に倒して進めと、自ら陣頭に立ち、エイ／＼と呼ぶ、將卒之に應じてオウ／＼と叫んで猛進す」(布施氏上杉謙信傳) 甲軍備を立て直す暇もなく、山本、信繁、諸角の諸將苦戦の中に戦死を遂げ、今や甲軍の第一陣は悉く潰亂した。

此時勇猛鬼神の如き謙信は突如として現はれた。

「然ば萌黄の胴肩衣きたる武者、白手巾にてつぶりをつゝみ、月毛の馬に乗り三尺斗の刀を抜持ちて、信玄公牀机の上に御座候處へ、一文字に乗よせ」(甲陽軍鑑)

「信玄何處にありや」と躍り込み、信玄の持てる軍團扇を断つて肩を二太刀切下げた。

「かくと見て甲州方の原大隅と申御中間頭槍を持ち武者をつけば、つきはづしたるより、具足のわたがみをかけ、うちつれば馬のさんずをたたき、馬さうだつて、走り出で候、後



聞けば其武者輝虎なりと申し候」(甲陽軍鑑)

かくして戦の前半は、甲軍苦戦に陥つたが、妻女山迂回軍の來るに到つて、主客顛倒し、越軍が犀川を渡つて退く所を追撃して、殺傷各當つた。

第三十 毛利元就

史眼

一 早雲と元就

偉人は時代を作り、時代はまた偉人を生む。嚴島社頭、十二歳の元就の大志は、これ即ちこの時代の時代精神であり、而かも十二歳の幼き幻影が、七十五歳の白頭翁に至つて完全に成し遂げられた偉大さは實に驚嘆に値する。

戦國の世、英雄豪傑の輩出雲の如く多かつた中に、大成功者としては西に毛利元就、東に北條早雲の二人であらう、(信長や秀吉も勿論大成功者には違ないが、この二人は時代がすつ

と後れてゐる)しかし其の領國の比較は到底早雲は元就の敵ではない。早雲一代八十八歳まで抜目なく働いても、其の得たる所は伊豆相模二國に過ぎなかつたのに、元就は安藝、備後、周防、長門、石見、出雲の六國の主となり、其餘勢は伯耆、因幡、備前、備中の諸豪を壓し、更に海を越えて四國の伊豫、九州の豊前まで及んでゐた。そしてこの二人は何れも長壽であつた。所謂命あつての物種とはよく言つたものだ。

更に二氏の似通ふ點は、其の治國の民政に意を用ゐた點だ。早雲は常に兒孫に戒めて、「君は父、民は子だ、子を愛せぬ父があらうや」と言ひ、孤獨を憐み窮民を賑した。元就もまた常に民心の傾く處に意を致し、己の治世を反省した。

「或時郡山の山下の町を御打廻りの爲め、夜に入御通り被成候處に、小家にわらべの聲にて御城の方へ跡をなすまじき哉と親にとへば、親聞て神より佛より貴きは殿様也、いつもの如く寢よと申候を被聞召、扱はあの如く小家成る百姓まで御爲を奉存候哉と被思召御満足被遊、右の百姓を被召出田畠如何程作り申候哉と御尋ね候へば、三反作り申の由申上候、則ち作取りに仕候へと被仰付候由、是又古き衆申傳候事。(吉田物語)

二 元就の強み

人間が七十にも達せば、多く世事に遠ざかり、風流韻事に餘世を終らんと欲するのが常だ、いや七十は愚か六十でも五十でもこれに走らんとするのが人情である。元就が多年の勁敵尼子氏を滅し富田城を収めたのが七十歳であつたが、なほ兀々として戦陣に始終した。見よ永祿十二年九州大友氏を討つや、七十三翁の元就は十七歳の嫡孫輝元を携へて出陣してゐる嬰傑たる英姿を。

しかし元就とて人間だ、其の晩年を心安らかに送りたいとの念は、念佛信者であつた彼には人一倍動きつゝあつたであらう。彼の三子に遺せる遺戒状の中に

『(前略)然る間はやく心安く、ちと今生の樂をも仕、心靜かに後生の願をも仕度候へ共、其段も先づならず候て不申及候く』

と述懐してゐる、見方によつては氣の毒にも考へられるが、天性質實精力絶倫の彼、其の命を終るまで殆んど一日の安息がなかつた。

『唐の兵書御稽古も不被遊候へども、武略智略計策のは御調略少も和漢の兵書の旨に違ひ

不申との儀に候、晝夜の御工夫御油斷不被遊候故、御一心の御悟り自然とひらけ申候と取沙汰仕候、御一生の内夜をとくと御寢なり不申候、御枕本に燈火御硯紙被爲置候て、諸所の御調略又諸境目の衆への御書御案文毎夜被遊候』(吉田物語)

史料

毛利元就漸く勢を得たり

毛利氏は大江廣元の後裔である。すなはち廣元の子季光が相模國愛甲郡毛利庄を領してあつたので、土地の名を採つて姓とし毛利と名乗つた。季光の孫時親の時安藝國吉田に移り、(この時親は吉野朝の頃足利尊氏に屬して功あつた)時親の九世の孫に當る弘元は元就等の父である。

元就は二男に生れたが、兄興弘が元就二十七の年逝いたので兄の跡を繼いだ。

當時の元利氏は所謂安藝三十七豪族の一つで、所領と言つても眇たる地方の一郡にも當らなかつた。そして大内尼子の二大勢力の間に介在して居つた爲め、始めは大内氏に従つて居

たが、後尼子氏に屬し、天文三年以後又大内氏の部下に入ること誓ひ、長子輝元(當時十二歳)を人質として山口に送つた。

これから元就は大内氏の前衛軍となつて、連年尼子氏と戦ひ殊勳を奏し、漸次頭角を顯はして大内氏の外藩とし勢望自ら備はるやうになつたが、其の中國の雄として其名天下に聞えるようになつたのは、弘治元年陶晴賢を討つて安藝備後二國を領してからである。

大内氏の勢力

大内氏は當時中國地方の強雄で、其祖は推古天皇の朝に歸化せる百濟王第三皇子琳聖太子であると言はれる。代々周防に住し、居所大内を姓とした。(吉田物語)

義興は其二十二世の孫で、當時應仁の亂後京都は荒廢したので、朝廷の公卿殿上人等山口に移り來る者多かつた。これより先き幕府は(義教時代)明との貿易の管理を大内氏に任じてあつたから、山口の繁榮は年と共に加はり、義興義隆の時代には朝鮮、印度等の間にさへ交通開け、海外の珍寶を獨占した。(當時山口には眼鏡望遠鏡まであつたといふ)

義隆は勤王の志厚く、後奈良天皇の御即位の資を献じ又御所の修理の爲めに力を致したが、

武備に心を怠り日夜京都より移住の公卿等と詩歌管絃の遊に耽り、或は茶の湯禪道に日を送ること多く、遂に逆臣陶晴賢のために殺され、連綿として續いた名家は遂に絶えてしまつた。

嚴島の戦

元就は意已に陶討伐に決したが、陶は今や防長二國を收めて勢破竹の如く、俄に對抗すること六かしかつたので、暫く陰忍して時機を待つたが、遂に天文二十三年に至つて、元就は晴賢に向つて戦端を開いた。

この戦の中であつた。毛利は陶の間者を利用して嚴島を襲はれることが非常に毛利に取つて恐ろしい事のやうに話かけ、遂に陶を嚴島に誘ひ出した。

元就は野戦に於ては、其の兵數に於て到底勝算の立ち難きを知り、わざと嚴島に小城を築いて敵を誘ひ、一舉に之を盡滅せんと計畫見事に成功し、弘治元年十月晦日の夜、折柄の風雨を衝いて諸軍に發船を命じた。

「總勢上下共に、柵の木一本繩一房可持之三日の飯米を腰につけ、左繩のたすき二つ巻、合言葉は勝と問ば勝と可答、總船にはかゞり火焼くべからず、御座船の火を目當てに仕り

可渡海云々」(吉田物語)

全軍必勝を期せるの状が目に見える。更に將卒が如何に此の合戦を以て一か八かの決戦と意氣込みたるかは、次の一挿話が語つてゐる。

『元就が嫡子隆元に向つて、此合戦に萬一自分が討死の事あらば、後圖の備をなすべしとて殘留を命じた。然るに隆元の言ふやうには、此戦にたとひ父上がお残りなるとしても、渡海の兵悉く討死したら毛利の弓矢は立つまじく思ふのに、まして自分の如きものゝ残ることは存じも寄らぬと、具足の上帯の端を切つて決死の覺悟を示し船に移つたので、手廻の者も死を決して乗船した。』(吉田物語意譯)

元就は三千の兵を二分して、一手は自ら之を率ひて搦手の鼓の浦に上陸し、悉く船を對岸に還らした。他の一手の兵は小早川隆景(元就の三男)之を率ひて島の大手大鳥居の邊から上陸した。

かくして十一月一日の朝ほのくくと白む頃、元就の軍螺を吹き鯨波を作つて山下の陶の本陣に切入つた。敵は周章狼狽争つて船に乗つたが、亂軍のため溺死するも何千と言ふを知ら、

ず、大將晴賢も逃れて海岸に走つたが、最早や一艘の船もなく、取つて返さうとすれば、元就隆景の兵ヒシ／＼と迫つて來るので遂に自殺した。この戦午前六時より始まり午後二時に至つてやんだが、嚴島神社の靈域を血で汚したことを神に謝せんがため、死屍負傷者を對岸に運び、血の流れた土を削り去り、社殿廻廊を悉く洗ひ淨めて御神樂を奏したといふ。

尼子氏の富田城を陥る

嚴島の大捷によつて周防長門を領有した元就は、更に出雲石見に蟠居して常に脊面の脅威であつた尼子氏との對戦に入つた。

これが又長い／＼戦争を續け、漸く敵をして富田の本城に追ひ込み許りになつて、嫡子隆元が卒に死んだ。しかも當年六十六歳の老將元就は少しも戦の手を緩めなかつた。富田の城は月山といふ山の上にてつて要害非常に堅固で容易に攻め落すことが出来なかつたから、城就は之と相對して洗骸城を築き長圍の計に出た、かくして攻圍三年城中兵糧罄きて大將尼子義久は、降を毛利の軍門に入れた。

元就三人の子を戒む

今、吉川子爵家に藏されてある元就の遺誠状といふ文書は、十四五箇條の長文になつてゐるが、之を要するに毛利吉川小早川の三家互に相親睦して、家名を揚げよと訓誡したものである。其中の二三を擧げて見ると。

- 一、元春隆景の事他名の家を續がるる事に候、然りと雖も之は誠の當座の物にてこそ候へ、毛利の二字仇愚にも思召し御忘れ候ては、一圓なき曲事に候、中々申も愚かにて候、
- 一、隆元の事は、隆景元春を力にして内外様共に申付けらるべく候。然るに於ては何の仔細あるべく候ふや。又隆景元春事は、當家だに堅固に候はゞ其力を以て家中は存分の如く申し付けらるべく候、唯今如何に我れ〜が家中〜、存分の如く申し付け候と存ぜられ候とも、當家弱く成り行き候はゞ人の心持ち相替はるべく候條、兩人に於ても此の御心持肝要に候。
- 一、此の間も申候如く、元春隆景違ひの事候とも、隆元偏に親氣を以て、毎度堪忍有るべく候、又隆元違ひの事候とも、兩人の事は御従ひ候ては、順に叶はざる儀に候。(以下略)

第三十一 後奈良天皇

史 眼

一 勤王心は地方人に厚し

戦國の世は世を擧げて征戰攻伐に従事したので、人心も従つて目前の利害に眩み大義名分の道に暗かつた。つまりさう言ふ方面の教育を受けなかつた。武士階級に於ては自分の主人の爲めに一命を捨てるといふことは、幼少の時から家庭の訓育を受けたが、天皇に對し奉つて斯く〜といふ教育は甚だ暗かつた。

それに應仁の亂後、引續いて海内諸國の争亂となつたので、御領地などもいつの間にか轉々して勢力ある者の領地に合されてしまつた。又皇室の御費用は幕府から年々差上げて居るべき掟のものが、其の幕府が名ばかりで實力兵力も財力も少しもないのだから、當時皇室の御衰微は申すも恐れ多い事になつてしまつたのである。

しかしこの御衰微に對して、よく奏請或は献上の誠を致した者は、遠い地方に居つて偶々御式微の御模様を拜聞した者の中にあつた。昔も今も地方人に眞に忠誠の赤心を失はない人が多いことを考へさせられる。すなはち越後の上杉謙信、周防の大内義興義隆父子、毛利元就、下つて織田信長などの諸將であつた。此の間に交つて宇治慶光院の一尼僧清順の勤王敬神は、其の志の堅きと其の勞苦の尋常ならざるの點に於て、實に異彩の光を放つものである、

二 三千年を貫く國體の光

この時に當り天皇親筆の般若經を納めて、疫病退散の御祈願を籠め給へる御一事は、實に我皇室の御仁徳とも、皇國の御國體とも、其の辱なきに唯感涙あるのみである。

畏くも「朕爲民之父母」の御信念は、古往今來三千年を貫いて易らせられぬ有り難い大御心であらせられ、嘗て延喜の昔には寒夜に御衣を脱して民の苦を察し給ひ、元寇の國難に當つては御身を以て國難に代らせられんと終夜の御熱禱となつたのも、この「朕爲民之父母」の御精神と拜察し奉るのである。

史料

朝廷哀ふ

「信長の時は禁中の微々なりしこと、邊土の民屋に異ならず、築地などは無く、竹の垣に茨など結び附けたる様なり。老人、兒童の時は遊びに往きて、縁にて土などねやし、破れたる簾を折節あげて見れば、人もなき體なり。信長知行など附けられ造作など寄進ありし故に、

禁中の居なし善くなりたり……禁中信長の時より興隆すと雖も、太閤の始までは未だ微々たり、近衛殿に歌の會などあるに、三寶の臺色飽くまで黒きに、ころ／＼とする赤小豆餅を載せて出されたり、然れども歌は今時の人に十倍す。

常磐井殿といふ公卿に、目見えを望む人あり、媒介の人言ひ入れければ「夏衣裳にては恥かしき」と宣ふ。「苦しからず」とて具して行きたり。彼の人も夏の裝束ならんと思ひしに、帷子無くて蚊帳を身に巻きて會はれしとぞ。信長の時分なり」(老人雜話)

伊勢神宮の造營

伊勢の内外宮は二十年目に、神殿を造り改むること古よりの制であつたが、朝廷も幕府も財政の困難に陥りたる此の時代には、久しく遷宮の御事なかりしを、宇治の慶光院の尼僧清順の力を以て先づ外宮の造營せられたことは、實に奇篤の美舉であつた。

清順は夙くも神宮の衰替を慨き復興の志があつた。自ら諸國に勸説して資を得、後奈良天皇の天文十八年に先づ宇治の大橋を造營したので、天皇より綸旨を賜はり上人號のお許しを受けた。清順愈々神宮造營に精進せんとし、外宮長官に謀り朝廷に申請して裁可を經、再び

數年諸國に勸説し、東は北條西は尼子に及び、其の得たる資金を以て正親町天皇の永祿六年、漸く外宮の正遷宮を行ふことを得た。

外宮は後花園天皇の永享三年に御遷宮になつたまふであるから、爾來百三十年を経て漸く御遷宮になつたわけである。清順は更に内宮の造營に及ばんとしたが、永祿九年四月空しく志を懷いて、宇治慶光院に寂した。

然るに其の弟子周養、奮然起つて亡師の志を繼ぎ、天正三年即ち清順死して九年目に内宮の假殿遷宮を舉行し奉つた(史學雜誌第十七編 遷宮と慶光院梗概)之より後は、織田信長豊臣秀吉の勤王によつて神宮の制も舊に復するやうになつたのである。

經文を寫したまふ

佛に對して祈誓を籠める場合に、經文を寫して納めるといふことが、遠く奈良朝の頃から初まり、其後平安朝に至つて愈々盛になり、神に祈願する時も寫經せられた例もある(中古の本地垂迹説が唱へられる様になつてから)

後奈良天皇のこの時の御寫經は、般若心經で、御自署に

今茲天下大疫萬民多跼放死亡、朕爲民之父母、德不能覆甚自痛焉、竊寫般若經一卷於金字使義堯僧正供養之、庶幾瘳疾病之妙藥矣
と御認めになつた

時代の流 (其の三)

(鎌倉幕府より足利幕府崩壊まで……三九〇年間)

武家政治に始終した所謂近古期である。

鎌倉時代	約百五十年
吉野時代	約 六十年
足利時代	約百八十年

の三期に區分することが出来る。

* * *

地方文化は源頼朝によつて創始された鎌倉幕府によつて始めて支持された。平清盛は唯政權の亡者に過ぎなかつたが、頼朝はそれに比し眼光が鋭かつた。彼は天慶以來殆んど無政府に等しかりし日本に、肅然たる秩序を與へんことを期し、其の任命せる守護地頭に向つては嚴かに安民の政治を求めた。

北畠親房は其の頼朝の築きし鎌倉幕府を倒して、政權回復を謀つた勤王家であるが、頼朝に對して

「凡そ保元平治より以來の亂りがはしきに、頼朝と言ふ人もなく、泰時と云ふものもなからましかば、日本國の人民いかになりまし、このいはれを知らぬ人は、故もなく皇威の衰へ武備の勝ちにけると思へるは誤りなり」(神皇正統記)

と、頼朝の功業を批判せる史眼は、實に時流の群を抜ける卓見である。

頼朝は平氏覆滅の跡に鑑みて、質素儉約を奨め武邊に心を離さなかつた、この武斷的政治に最も切合し益々精神の修養に資する所の多かつたのは、新らしい宗教の禪學であつた。

この偉人の力と時代宗教の指導によつて起り來つた所のものが所謂武士道といふのであるが、しかし夫は日本固有の精神の更生に外ならぬものであつた。兎に角鎌倉時代初期の思想界は、復古的内容的で、是を以て平安朝末百年の淫蕩無爲の弊風を一掃し去つた。

而してこの養はれたる精氣が、たまく來れる元寇の國難に當つて憂然として響き之を粉碎し盡した。

しかしそれからの鎌倉幕府は、漸く武士の驕慢を馴致し、質素儉約の祖法を紊りたるため財政難に陥りつゝ、一方統御上の策に窮し、祖先の榮光空しく失はれて急轉直下するくゝと滑り落ちる外なかつた。彼の北條高時の犬合せとか、田樂とかに狂態を演ずる有様は正に時代末の頽廢を露出してゐる何よりの證據だ。

茲に於て朝廷の政權回收運動の起り來るのであるが、後醍醐天皇の御意志が、多年窮乏に惱める廷臣公卿の、利權執着の焦燥に誤まれ、大衆の武家の反感を買ひたるは惜しみても餘りある事であつた。この爲めに時代は淨化される所なくして、其の鎌倉時代末期の汚濁のまゝに滔々として流れ去り、其の濁流に帆をあげたのが足利尊氏であつた。しかし其の足利内閣といふ大船は船頭から水夫に至るまで、悉くこれ恩賞亡者や本領安堵の餓鬼ならざるはなく、大船がともすれば水が漏り、顛覆の危機幾度か起つた。それをどうやら修繕を加へて、威容を整へたのが足利義満であつたが、元より根元的の仕業でなかつたので、爾後僅かに半世紀にして應仁の大亂が勃發して了つた。

世の禍亂と平安とは、それは決して忽ちに起り忽ちに没するものではないのである。

今試みに應仁の亂を考へるとしても、それは將軍家や斯波畠山の家督争ひが原因ではない。そんなのはたま／＼の機縁になつたかも知れないが、もつと大きな潮の流が澎湃として流れて其の結齣がさういふものになるのである。

平安朝末期の清算が保元から文治まで二十五年かゝつた。そして鎌倉の平安が生み出され、その時代末が吉野朝六十年の波瀾となり、義満の統一によつて一時小康を保つたが、遂に應仁の亂となり、其後約百年の戰國時代を現出して、世の中は根こそぎ大立て直しにかゝらなければならなくなるのである。

この根本的の改造に面しては、一揆と言ふ珍現象も現れた、虚勢を張つてお體裁ぶつた貴族は貧乏のどん底に突き落された。先例や故實は鏗一文の値もなくなつた。何でも實力で押し通し、主人を冒す従臣、領主を追出す土豪、世は下剋上の無慘な有様と變つて行つた。つまり平安末から見て第三期の改造である。

(五學年
本文終り)

昭和十年三月十六日印
昭和十年三月二十二日發行

教壇上の國史(奥付)
定價壹圓八拾錢



320

著者 澁谷 光長

發行者 生地 龍太郎

印刷者 尾崎 元治

東京市本郷區元町二ノ二一
東京市深川區新大橋三ノ六

發行所

東京市本郷區
元町二ノ二一

啓 文 社

振替東京三八七七六番
電話小石川五五二九番

東京高等師範訓練 佐藤末吉・井上正記共著

敬と愛の學級教育

四六判上製函入
定價一・八〇
送料十二

從來の學級經營論は何等の理論に立脚せず。單なる行事學習の範圍を脱さざる形式主義的なものではなかつたか。
本書は眞の學級教育の本體は兒童對教師の敬と愛の精神的關聯交渉を基調とし、而して此の本體より形成される教育作業は、兒童の學級學校生活を兒童の成人後の活動舞臺たる社會を對象として、眞に社會完成に貢獻し得る社會の一員たらしめ得べき教育を目標として學級教育の體系を樹立しなければならぬ、との主張の下に學級教育に對する新しきシステムと新見解を示せる一大快著である。今日、學級教育の理論は全く行き詰りの感を深くしてゐる時本書の出現は學級教育のシステムに一大新生命を與へるものではあるまいか。

序説 (根本問題としての人世私觀)

第一章 教育の本質感と教育經營基調	第三章 教育愛の批判的考察と陶冶目標
第一節 教育の本質觀	第一節 愛とは何ぞ
第二節 學校教育理想の歸趣	第二節 愛の種々相と教育愛
第三節 對立的目的觀	第三節 文化價值と愛
第四節 止揚的目的觀	第四節 社會生活と愛
第五節 教育理念の特殊化としての國民教育の目標	第五節 共同社會の考察と陶冶目標
	第六節 文化價值の考察と陶冶目標
	第六節 教育方法觀の考察と歸趣
	第七節 教育基礎觀

263
253

終

